

2017年度

日本農業経営大学校 シラバス



日本農業経営大学校

Japan Institute of Agricultural Management

2017 年度 日本農業経営大学校 シラバス 目次

カリキュラム概要

カリキュラム全体像	3
経営力領域科目一覧	4
農業力領域科目一覧	5
社会力領域科目一覧	6
人間力領域科目一覧	7
現地実習、ゼミ、総合的学習、卒業研究、特別講義、特別活動	8

経営力領域シラバス

<経営力入門>

マーケティング入門	11
農業簿記	12

<経営戦略>

農業・食の経営戦略	13
農業経営学	14
情報戦略の理論と実践	15
農業・食の経営組織	16

<流通・マーケティング>

消費者の心理と行動	17
食農連携マーケティング	18
食品流通論	20

<会計・マネジメント>

農業経営の会計・ファイナンス	21
コーポレート・ファイナンス	22
農業におけるリスク管理	23
農業経営の社会的責任	24
経営者の法律	25

<事業創造・イノベーション>

ナレッジマネジメント	26
イノベーション実践論	27
アントレプレナー論	28
農業経営改革実践論	29

農業力領域シラバス

<農業力入門>

日本農業論	33
-------	----

<生物と農業>

生物と農業生産Ⅰ	35
生物と農業生産Ⅱ	37

<資源・環境と農業>

資源・環境と農業生産Ⅰ	39
資源・環境と農業生産Ⅱ	42

<食料・農業の政策と法律>

日本の食料・農業政策	45
世界の食料・農業政策	46
食料・農業の法律と制度	48

社会力領域シラバス

<社会力入門>

フードシステム論	51
----------	----

<消費者・食生活・食文化>

食生活と食文化	52
食品産業と農業	53
消費者運動と食・農のパートナーシップ	54

<農村地域の活性化>

農山村の再生戦略	55
協同組合論	57
集落営農とJA出資型農業法人	58
農村社会と女性	59
地方行政との連携・協働	60

人間力領域シラバス

<人間力入門>

経営者のための経済学	63
経営者のための社会学	64
時代、世代、消費	65
経営者のための哲学	66

経営者のための英語力.....	67
経営者のための心理学.....	68

<リーダーシップ>

経営者としてのリーダーシップ.....	69
地域・農村のリーダーシップ.....	70

<グローバル発想>

日本農業史.....	71
------------	----

特別活動シラバス

<体育的活動>

Hiphop ダンス.....	75
ヨガ.....	76

<文化的活動>

華道.....	78
囲碁.....	79

ゼミ

小野ゼミ.....	83
小口ゼミ.....	85
原田ゼミ.....	87
松尾ゼミ.....	89

カリキュラム概要

カリキュラム

区 分				授業時間					単位
講 義	領域	学 群	科 目	1 年次		2 年次		計	
				前期	後期	前期	後期		
	経営力	経営力入門	オリエンテーション	60				60	
			マーケティング入門	15				15	1
			農業簿記	24	6			30	2
		経営戦略	農業・食の経営戦略	15	15			30	2
			農業経営学	22.5				22.5	1.5
			情報戦略の理論と実践		15			15	1
			農業・食の経営組織				15	15	1
		流通・マーケティング	消費者の心理と行動	12				12	1
			食農連携マーケティング		30			30	2
			食品流通論		15			15	1
			農業経営の会計・ファイナンス		6	24		30	2
		会計・マネジメント	コーポレートファイナンス				15	15	1
			農業におけるリスク管理				15	15	1
			農業経営の社会的責任				15	15	1
			経営者の法律				15	15	1
		事業創造・イノベーション	ナレッジマネジメント		15			15	1
			イノベーション実践論				15	15	1
			アントレプレナー論				9	9	0.5
			農業経営改革実践論				6	9	15
		計		88.5	102	60	78	328.5	22
	農業力	農業力入門	日本農業論	15				15	1
		生物と農業	生物と農業生産Ⅰ	12				12	1
			生物と農業生産Ⅱ		21			21	1.5
		資源・環境と農業	資源・環境と農業生産Ⅰ		24			24	1.5
			資源・環境と農業生産Ⅱ			15	13.5	28.5	2
		食料・農業の政策と法律	日本の食料・農業政策	12	10.5			22.5	1.5
			世界の食料・農業政策			15		15	1
			食料・農業の法律と制度				15	15	1
		計		39	55.5	30	28.5	153	10.5
		社会力	社会力入門	フードシステム論	12				12
	消費者・食生活・食文化		食生活と食文化		12			12	1
			食品産業と農業			9		9	0.5
			消費者運動と食・農のパートナーシップ			12		12	1
	農村地域の活性化		農山村の再生戦略	12	12			24	1.5
			協同組合論		15			15	1
			集落営農とＪＡ出資型農業法人			15		15	1
			農村社会と女性				15	15	1
	地方行政との連携・協働					15	15	1	
	計			24	39	36	30	129	9
	人間力	人間力入門	経営者のための経済学	12				12	1
			経営者のための社会学	15				15	1
			時代、世代、消費		6			6	0.5
			経営者のための哲学		15			15	1
			経営者のための英語力		15			15	1
			経営者のための心理学			15		15	1
		リーダーシップ	経営者としてのリーダーシップ		15			15	1
			地域・農村のリーダーシップ			15		15	1
		グローバル発想	日本農業史			15		15	1
		計		27	51	45	0	123	8.5
	合 計		238.5	247.5	171	136.5	793.5	50	
区 分									
現地実習	先進農業経営体派遣実習（１年次・７月～10月の４か月間）			450	180			630	14
	企業実習（２年次・７月後半～10月前半の３か月間）					360	90	450	10
	計			450	180	360	90	1080	24
ゼミ	学年別ゼミ			30	30	30	30	120	4
	合同ゼミ			15	15	15	15	60	2
	計			45	45	45	45	180	6
総合的学習					51	39		90	3
卒業研究							150	150	5
特別講義				33	48	45	54	180	6
特別活動	体育的活動			15	15	15	15	60	2
	文化的活動			15	15	15	15	60	2
	視察研修			40				40	—
	学校行事			28	27	52	33	140	—
	計			98	57	82	63	300	4
通常講義以外の合計				626	381	571	402	1980	48
総 合 計				864.5	628.5	742	538.5	2773.5	98

注：授業時間は1単位時間＝50分である。1コマ（75分）の授業を1.5時間とする。（授業時間の15時間は、10コマの授業に相当する。）

経営力領域

経営者に求められる本質的な知識や技法を学び、経営者としての判断、決断ができる資質、能力、態度を育む。

学群	科目	授業 時間	単位	開講時期・コマ数			担当講師	概要
				1年 前期	1年 後期	2年 前期		
経営力入門	マーケティング入門	15	1	10			松尾和典（日本農業経営大学校専任講師） 折笠俊輔（公財）流通経済研究所主任研究員）	マーケティングの定義や考え方を中心に、基本的な知識を講読する。様々なケースを中心にマーケティングの成功要因を自ら考えることに重点を置く。また、マーケティングに関わっている実務家を招聘し、実践的な話を聴く機会を設ける。
	農業簿記	30	2	16	4		野島一彦（学校法人大原学園 簿記講座教務部 部長代理） 西山由美子（税理士、にしやまゆみこ税理士事務所 所長）	農業簿記特有の教科書・問題集を使用し、簿記の基本から、農業特有の取扱いを随手えた日常的な記帳、決算時の会計処理、財務諸表の作成までを段階を多く取り入れながら学習し、1年次前期において農業簿記検定3級試験の合格を目指す。また、税務上の取扱いのうち、農業特有の内容を学習する。
	農業・食の経営戦略	30	2	10	10		上原征彦（昭和女子大学現代ビジネス研究所特命教授）	農業経営における競争優位を顕出し、戦略を立案し、意思決定をするための力、それを実行しつづける力を身に付けることを目的とする。ケーススタディを活用するとともに、優れた農業経営者の成功要因を調べ、これをもとにディスカッションを展開しつつ、より現実的な問題にアプローチしていく。
経営戦略	農業経営学	22.5	1.5	15			南石晃明（九州大学大学院農学研究院教授） ほか	学際的・国際的な視野に立つて農業経営発展に資する経営管理の理論と方法について学ぶ。農業は地域に根差した産業であるが、次世代の農業経営には、他産業や海外農業の動向・発展方向についても理解をし、地球的・長期的な視点から経営戦略の策定とその効果的な実行を行うことが求められる。そこで、多様な農業経営者の発展過程とその経営管理について、理論および方法の両面から理解すると共に、実践的な農業経営管理手法を身に付ける。
	情報戦略の理論と実践	15	1	10			松尾和典（日本農業経営大学校専任講師）	経営・マーケティング活動における情報戦略を幅広く学習し、イノベーションの実現、顧客との新たなリレーションの構築、農産物の販売手法の拡充等、情報をいかに戦略的に活用していくかを実践的に学習することを目的とする。ケーススタディや実践者からの講演等を取り入れた授業を行う。
	農業・食の経営組織	15	1		10		納口るり子（筑波大学生命環境系教授） ほか	農業経営を人的組織として把握する必要性、従業員採用・研修や経営内の経営情報の集積、後継者の育成方法などについて論じる。大規模農用型家族経営や雇員型農業法人を想定しているため、中小企業で採用されている人的資源管理の視点や、ネットワーク型の経営間組織についても考察する。講義は農業法人の経営者を含む実務者による講演も想定している。
	消費者の心理と行動	12	1	8			神谷渉（玉川大学経営学部国際経営学科 准教授）	消費者が買物や、所有、商品の使用といった消費活動を行う際に、どのような要因が存在するのか、それらはどのように影響し合うのか、それらによってどのような結果が生じるかを学ぶ。手法を講義後、簡単な実習を通じて基礎の習得を目指す。
	食農連携マーケティング	30	2	20			三村優美子（青山学院大学経営学部教授） ほか	地域社会・農業の価値を活かすマーケティングを食農連携マーケティングとした上で、その基本的な考え方や、実践に至るまで、事例研究、実務家による講演や討論を通して学ぶ。最後に食農連携マーケティングをどう進めるかグループによる企画提案を行う。
	食品流通論	15	1	10			大塚 明（前日本スーパーマーケット協会専務理事） 高橋佳生（公財）流通経済研究所常務理事）	流通の基本的な概念・機能等並び、さらに消費財全般の流通チャネルの変革や、国際化、法規制といった最新のトレンドに即した最新の流通課題を学ぶ。また、農業・食品産業にかかわる流通についての講義も実施することで、農業経営者として実務で活用できる知識の習得を目指すものとする。
会計・マネジメント	農業経営の会計・ファイナンス	30	2	4	16		森 剛一（税理士、アグリビジネス・ソリューションズ(株)代表取締役）	農業経営を数字によって把握すること、利害関係者に的確に説明できる能力を磨く。また、農業経営を発展させるための経営計画を策定するスキル、明確な投資判断や資金調達をするための方法を身に付けることを目的とする。講義は演習方式により、経営の課題について実習を行うことで、財務諸表の読み方や経営分析の手法を学ぶ。
	コーポレートファイナンス	15	1		10		竹林 隆一（株）（クリエイティブ・ジャングル 代表取締役社長）	本講義では、ファイナンス理論に始まり、経営者として意思決定を行う力を身に付けていくことを目的とする。意思決定とは、結果とする際の投資や削減の判断、そして結果となる事業員の調達は、その後の運用に係る事項を指す。また、意思決定の概念や構造を理解した上で、足許の意思決定や資金調達の考え方や実務について学ぶ。
	農業におけるリスク管理	15	1		10		池戸重信（宮城大学名誉教授、（一社）日本農林規格協会会長）	農業は自然を相手に生かすものを生産する産業であるから、2次、3次産業以上に、経営リスクが大きい。6次産業化によって事業内容も複雑化するにつれ、リスク管理が経営の命運を左右する可能性が増大する。この授業では主要なリスクとそれへの対処方法を習得する。
	農業経営の社会的責任	15	1		10		（調整中）	本講義では、経営を実践していくうえで求められることになる社会的責任がより戦略的になり、同時に長期的な取り組みとして、経営における大きな課題となってきたことを確認し、今後の戦略として、どのような選択が考えられるか、を目的としている。
	経営者の法律	15	1		10		須藤英章（弁護士、東京富士法律事務所代表） 足立学（弁護士、東京富士法律事務所） 須賀一也（公認会計士、須賀公認会計士事務所代表）	事業の展開や組織の運営を行う際に直面する、経営者として最低限身に付けておくべき法律知識の習得を目的とする。授業では、民法を中心に各権利契約の概念につき、法律の条文や判例等を織り交ぜながら、実際の農業経営での活用を前提に学ぶ。さらに、税法の基礎について学習する。
	ナレッジマネジメント	15	1	10			梅本勝博（北陸先端科学技術大学院大学大学院知識科学研究所名誉教授）	組織経営における知のマネジメントの理論的枠組みと実践方法について理解する。経営を知の創造・共有・活用のプロセスとして捉え、その理論的モデルと実践戦略・手法、情報技術の活用、場の役割などを掘りながら、事業創造のためのビジネスモデルという知識を創造するための方法論、農業のサービス化と顧客との価値の共創の重要性を学ぶ。
	イノベーション実践論	15	1	10			丹羽清（東京大学名誉教授）	受講生がイノベーションを事例に起こすにはどうすればよいのかという実践的課題を扱う。まず、イノベーションの基本的な考え方を理解して、それらを実践する際の応用上の課題を議論する。ついで、複数の人間からなる組織の中でイノベーションを実践に起こそうとする際の困難さを明らかにして、それらの解決の方法を議論する。
事業創造・イノベーション	アントレプレナー論	9	0.5		6	（調整中）	（調整中）	アントレプレナーの考え方、取り組み方について等々、特に創業者としての経営理念、経営指針、経営戦略の組み立てや、意思決定、人材採用・育成について、経営の実践者を通じて論じていく。また、ゲスト講師と学生、学生間でのディスカッション時間を積極的に設け、学びを深める。
	農業経営改革実践論	15	1		4	6	近藤修司（北陸先端科学技術大学院大学大学院知識科学研究所客員教授）	主体的に思考者となり出すという視点から経営改革事例と理論・手法を習得し、自分の改革実践提議書を構築する。経営改革実践者や経営分野・企業間経営分野などのコンサルタントが持っている「診断・問題設定・問題設定・正面構想・組織化人材育成・成果実現」の体系と経営改革実践力を習得する。

農業者に求められる本質的な知識を身に付けた上で、地域農業を牽引し、持続・発展させようとする農業の実践力に関わる資質、能力、態度を育む。

農業力領域

学群	科目	授業 時間	単位	開講時期・コマ数		担当講師	概要
				1年 前期	2年 後期		
農業力入門	日本農業論	15	1	10		小口広太 (日本農業経営大学専任講師)	農業の役割は、健康な食べものを生産し、人間の生命を支えることである。その成立条件は、「自然」と「地域(＝消費者)」との共生にある。農業経営には自然と暮らしを有機的につなぎ、生命の再生産と持続可能な社会の礎を構築していくことが必要となるという問題意識のもと、日本農業の特質を紐解き、普遍的な農業の価値について考える。
	生物と農業生産Ⅰ	12	1	8		平澤正 (東京農工大学名誉教授) 北条雅章 (千葉大学環境健康フィールド科学センター特任研究員)	農業は、生物の営みを利用して人間に有用な生産物を得る生命産業である。農業経営者は、工業生産とは異なる農業生産の特質を正しく理解し、植物や動物を科学の視点で観察する目が求められる。このため、植物・動物・動物を健全に栽培・飼育し、生産能力を高めるために必要となる基本的・本質的な知識を身に付ける。
	生物と農業生産Ⅱ	21	1.5	14		小林信一 (日本大学生物資源科学部教授) 澤登早苗 (東京女子大学人間社会学部教授) 渡辺均 (千葉大学環境健康フィールド科学センター准教授)	生物と農業生産Ⅰでは、作物及び野菜について学び、生物と農業生産Ⅱでは、畜産、果樹及び花きについて学ぶ。
資源・環境と農業	資源・環境と農業生産Ⅰ	24	1.5	16		隣藤行 (公財)農業・環境・健康研究所農業大学校校長) 莊林鈴太郎 (学習院女子大学国際文化交渉学助教授) 石郷岡康史 ((研)農業・食品産業技術総合研究機構 農業環境変動研究センター主任研究員) 宇根豊 (農と自然の研究所代表)	地球の水・大気・土壌等の環境資源には限りがある。農業生産を持続的に遂行するためには、農業が持つ物質循環機能を活かし、環境と調和した農業生産を持続的に行わなければならない。この未来はここからとしない。このため、環境資源、エネルギー等の問題を理解して農業経営を営む必要性を学ぶ。
	資源・環境と農業生産Ⅱ	28.5	2	10	9	隣藤行 ((公財)農業・環境・健康研究所農業大学校校長) 小川吉雄 (鯉渚学園農業栄養専門学校教授) 橋本カヲ男 (堆肥・育工研究所代表) 小針久 (茨城大学農学部教授) 葉師聖謙 ((研)農業・食品産業技術総合研究機構元バイオマス研究統括コーディネータ) 折戸秀秀 (農業者、レインポープラン推進協議会相談役) 折戸えりな (明治大学・早稲田大学非常勤講師) 相原成行 (有機農業実践者、相原農場代表) 松原紀行 (有機農業実践者、のらくら農場代表) 金子美登 (NPO法人全国有機農業推進協議会理事長、霜里農場代表)	資源・環境と農業生産Ⅰでは、農業と資源・環境との関係、大気環境、植物防疫、生物多様性等について学び、資源・環境と農業生産Ⅱでは、土壌環境、堆肥と土づくりに、農業と資源・エネルギーについて学ぶとともに、有機農業の実践者等から様々な取組みの実践例を学ぶ。
	日本の食料・農業政策	22.5	1.5	8	7	生源寺直一 (福島大学農学系教育研究組織設置準備室教授) 安藤光義 (東京大学大学院農学生命科学研究科教授) 江川寛 (中央大学経済学部准教授) 室屋有宏 (桃山学院大学経営学部教授) 内田多量生 ((株)農林中金総合研究所調査第一部長研究員) 長谷川晃生 ((株)農林中金総合研究所食農リサーチ室主任研究員) 小針美和 ((株)農林中金総合研究所調査第一部長研究員)	初回の講義で日本の食料・農業・農村政策の概要を把握し、続いて量と質の両面から国民の食の安全を確保する政策について論じる。そのうえで農業経営の成長を支える重要な要素である担い手政策や農地制度の推移と現状、農業経営の成長を支える重要な要素である金融政策や技術政策を学ぶ。さらに地域とともに生きる農業経営という問題意識に立つて、農村政策を学習する。
食料・農業の政策と法律	世界の食料・農業政策	15	1	10		生源寺直一 (福島大学農学系教育研究組織設置準備室教授) 三石諒司 (宮城大学食産業学部教授) 阿部詩 (ルアン・ウェイ) 首藤久人 (筑波大学生命環境系准教授) 平澤明彦 ((株)農林中金総合研究所基礎研究部主席研究員) 関根久子 (農研機構中央農林総合研究所センター農業経営研究領域上級研究員) 石井圭一 (東北大学大学院農学研究科准教授) 和泉真理 ((一社)JCG総研客員研究員)	最初の2回の講義で、先進国と途上国の政策と世界の食料貿易の構造を俯瞰する。そのうえで国別・地域別に具体的な政策について学ぶ。先進国については、アメリカとEUの動向や食料政策とともに、イギリス・フランス・ドイツの政策の特色を理解する。さらに、著しい成長を遂げつつあり、日本の農産物の販路としても重要性を増しているアジア (中国など) について、近年の食料・農業政策の動向を把握する。
	食料・農業の法律と制度	15	1		10	高木賢 (弁護士、公立大学法人高峰経済大学理事長、元食糧庁長官) 出田安利 (農林水産政策研究所次長) 松原明紀 (水産庁漁政部漁政課長) 武田泰明 (特定非営利活動法人アジアGAP総合研究所専務理事)	食料・農業に関する各分野の政策の枠組みを形成している食料・農業関係諸法律について、食料・農業に関する実態認識及びあるべき方向との関連の下に体系的に習得するとともに、食料・農業の法律に隣接する法領域についても学ぶ。

社会力領域

学群	科目	授業時間	単位	開講時期・コマ数			担当講師	概要
				1年	2年			
社会力入門	フードシステム論	12	1	8			中嶋康博 (東京大学大学院農学生命科学研究科教授) 中嶋晋作 (明治大学農学部専任講師)	食と農とそれらを支える社会的枠組みの現状と課題をフードシステムの概念を通して学ぶ。食生活の変化、食をめぐる産業、社会的に必要とされる制度の実態と背景を社会科学の視点、特に経済学的視点に基づいて、理解して考察できる思考方法を専門知識を身に付けることを目的とする。
	食生活と食文化	12	1	8			武見ゆかり (女子栄養大学栄養学部教授) 宇野薫 (女子栄養大学大学院 栄養学研究科)	地域で生活する人々の多様な「食の営み」を、環境要因も含め構造的に整理し、生活の質 (Quality of Life) の向上につながるような望ましい食生活やライフスタイルについて理解するとともに、国際的にも評価が高い日本の伝統的な食事パターンや食文化についての理解を深めることを目的とする。
	食品産業と農業	9	0.5	6			清水みゆき (日本大学生物資源科学部教授)	食品産業と農業の関係を考えるベースとして、産業構造と日本経済における地位の両面から、食品産業とは何かを学ぶ。農地法改正を機に増加してきた食品企業の農業参入についても、狙いと参入後の様子を知り、農業改革の手がかりとする。最後に6次産業化や産直連携の講義を踏まえ、学生間の討論を通じて農業と食品産業の良い関係づくりの道を探る。
	消費者運動と食・農のパートナーシップ	12	1	8			宮崎達郎 ((公財)生協総合研究所研究員)	生産者と消費者は、市場における供給側と需要側という立場であるが、ソーシャルメディアの発達などにより、その関係はより近く、対等になっている。消費者とパートナーシップを形成し価値共創していくことが、生産者の経営や社会的貢献にとって重要になってきている。 本講義では消費者運動と農業の接点をめくって、具体的な事例を挙げてケーススタディとディスカッションを行い、農業経営者が消費者の信頼を獲得し、消費者とのパートナーシップを構築していくために必要なことは何であるかを考える。
農村地域の活性化	農山村の再生戦略	24	1.5	8			小田切徳美 (明治大学農学部教授) 辻林幹太郎 (学習院女子大学国際文化交流学部教授) 橋井一伸 (鳥取大学地域学部准教授) 樫口卓也 (明治大学農学部准教授) 岡田直也 (法政大学現代福祉学部教授) 神代英昭 (宇都宮大学農学部准教授) 山浦陽一 (大分大学経済学部准教授)	この授業では、第1に、農山村の再生戦略にかかわり、マクロの状況と従来までの政策の概略を講述する。第2に、多面的な農山村の再生の要素として、「農林業」「生活」「資源・コミュニティ」の各論について論じる。そして、第3に、それらを総合化して、ヨーロッパの農山村再生の動きから学びながら、我が国における農山村の内発的発展の実践的方向性について学ぶ。
	協同組合論	15	1	10			阿高あや (JICA総研 副主任研究員) 石田正昭 (龍谷大学農学部教授) 小山良太 (龍谷大学経済経営学部教授) 松岡公明 (農林漁業団体職員共済組合理事長)	協同組合を運動 (association) と事業 (enterprise) の矛盾統合体として捉え、協同組合の基本原則を踏まえつつ、今日の協同組合の実態と課題を学ぶ。第1に、協同組合は歴史的な存在形態であるから、成立から今日までを歴史的に整理する。第2に今日の農と食にかかわる協同組合として、生活協同組合 (消費者購買生協) と農業協同組合 (総合農協＝JA) を対象として、その運動と事業の展開と仕組みを学ぶ。第3に、地域でみられる「新しい協同」の動きから、協同組合に求められる社会での役割を検討する。この授業では、協同組合論の専門的研究者をゲストスピーカーとして招へいし、具体的な講義を行う。
	集落営農とJA出資型農業法人	15	1	10			小林元 (広島大学助教) ほか	集落営農を①「むら」(地域と地域資源)、②「農法」(技術の発展) から捉え、歴史的発展と今日の多様な集落営農の特色とその意義を理解することを目的とする。集落営農は地域の実態に合わせて多様な発展がみられることから、地帯精確区分に注目して、さまざまな事例とそのリーダーたちの声を事例に随くことを重視する。特に集落営農を農業生産の組織化に矮小化することなく、地域づくりの観点から読み解くことで、受講者自身が将来地域のリーダーとして活躍することを期待し、その一助となることを目的とする。
	農村社会と女性	15	1				安倍澄子 (前 日本女子大学客員教授) 原珠里 (東京農業大学国際食料情報学部教授)	農業経営をこより大きく変へる変化に適応し、また、その変革に向けて農山村女性を取り組む活動状況や問題・課題を理解するとともに、この女性活動が地域活性化に運動するための取り組み方や活用すべき諸制度を学び、地域社会の新たな動きを創り出す資質・能力を身に付けることを目的とする。
地方行政との連携・協働	地方行政との連携・協働	15	1				大江正章 (出版社コモンズ代表／ジャーナリスト) ほか	農業・地域づくりに関する市町村の首長や職員の実務的な政策や発想、地域への波及効果について、当事者およびそれらの詳細に詳しい講師から学ぶ。 これまで進めてきた政策を具体的に紹介し、それらが生まれた背景、現状、達成点、今後の課題について議論していただく。あわせて、これからの農業の方向性、若い農業者に期待される役割を検討していく。

人間力領域

学群	科目	授業時間	単位	開講時期・コマ数			担当講師	概要
				1年	2年			
人間力入門	経営者のための経済学	12	1	前期	後期	前期	清水徹明（(株)農林中金総合研究所取締役基礎研究部長） 小野澤康晴（(株)農林中金総合研究所調査第一部長） 南武志（(株)農林中金総合研究所調査第二部副部長）	最初に、農業経営にとって一般経済の動向がどのように影響をもつのか、日本経済の歴史のなかで農業がどのような変化をたどってきたのかという観点から、農業経営と経済について、大まかに概観する。そのうえで、経済学の考え方の基本を説明し、農業・農業経営が経済学の視点からどうとらえられるのかを解説する。その後半は、主に日本経済を題材にして、新聞等で取り上げられる話題との関連性をもたせつつ、貿易の理論、貨幣と金融、財政について説明し、日本経済の課題について歴史的な経緯も踏まえて説明する。
	経営者のための社会学	15	1	10			原田雄太郎（日本農業経営大学専任講師）	社会の多様性や社会学の範囲について知り、経営者として社会学を学ぶ意義を確認する。社会が人と人との関係＝集団によって成り立っていることを踏まえて、現代社会の様々な関係性について考えていく。
	時代、世代、消費	6	0.5	4			三浦展（社会デザイン研究者、 (株)カルチャースタタディーズ研究所代表取締役）ほか	経営者が理解しておくべき社会現象やその背景にある社会動向に関して、とくに人口、世代、消費の観点から学ぶ。まず日本の人口の変遷とそれに関わる今後の日本の課題等を把握し、そして戦後世代の特徴、戦後社会の歴史の概観を踏まえ、これからの消費社会のあり方を学ぶ。最後に「第四の消費」的なライフスタイル、食生活などについてゲストの話を聞く。
	経営者のための哲学	15	1	10			大平浩二（明治学院大学経済学部教授）	次世代農業経営者としてわが国の農業を担うために必要な判断力・思考力として日本を取り巻く諸環境の分析能力の基礎を身につけることを目的とする。講義では、世界の政治・経済状況の変化、経済や経営の基本を学んだ上で、第一線で活躍する各界の経営者の経営思想・経営哲学に触れつつ、自らの農業経営のあり方を考える。
	経営者のための英語力	15	1	10			黒川恵子（会議通訳）ほか	農業経営に必要な情報がグローバルに行き来する現在、情報を正確読み解く技能が必要であり、基礎的英語の基礎力を身に付ける。英語と日本語の発想・表現の違い、交渉の仕方の違いを知り、英語を自分なりに利用・応用する方法を学ぶ。
リーダーシップ	経営者のための心理学	15	1	10			野田 稔（明治大学専門職大学院グローバル・ビジネス研究科教授） 浜田正幸（多摩大学経営情報学部・同大学院経営情報学研究科教授） 河合太介（経営コンサルタント、早稲田大学大学院商学研究科非常勤講師）	農業経営をおこなう上で知るべき心理学として、一般的組織マネジメントに必要な社員モチベーションや自己認知などの心理学の領域にフォーカスする。それと同時に地域に与え込み農業という産業に従事する固有の事象に対する心理学である。本講義では、この二つの領域をバランスよく取り扱う。
	経営者としてのリーダーシップ	15	1	10			古山和宏（公益財団法人松下政経塾 顧問）	リーダーとなるために必要となる普遍的な考え方や哲学を学ぶとともに、2年次の「事業計画書」作成に向けた基礎的な講座と位置づけ、授業では、学生同士の検討会、プレゼンテーションを経て、将来の「事業趣意書」を作成する。
	地域・農村のリーダーシップ	15	1	10			門間敏幸（東京農業大学名誉教授）	この授業では、リーダーシップの本質を整理するとともに、地域・農村におけるリーダーシップの特質と特殊性を明らかにする。さらに、リーダーシップの源泉となる経営者としての資質や能力の特質を学ぶとともに、農業経営者の能力における総合力の重要性を整理する。
グローバル発想	日本農業史	15	1	10			堀口健治（日本農業経営大学校長）ほか	封建制を打ち破り資本主義が全面展開する背景に産業革命がある。蒸気機関から電機、内燃エンジンという技術史を学びながら、なぜ農業はこの流れ（労働手段の技術）にすぐに乗れなかったのか・・・労働対象技術の種苗改良等に力を注ぐのはなぜか、をまず考える。この農業技術論から、次いで有限な土地に限定される農業の発展史（寄生地主制の展開等）、世界的に家族経営が長く主流になる世界的傾向の背景等を理解した上で、日本農業の近現代史に入る。

区分		授業時間	単位	実施時期・頻度	概要
現地実習	先進農業経営体派遣実習	630	14	1 年次・7 月～10 月（4 か月間）	全国各地の先進的農家・農業法人において実習し、優れた農業経営と技術を体感することともに、先進的な経営者から価値観、経営感覚、リーダーシップ、地域づくりなどをトータルに学び取り、将来農業経営者となるための自らの課題を認識する。派遣先は、学生が目指す将来の農業経営のあり方から選定し、学生自らの意思で決定する。
	企業実習	450	10	2 年次・7 月後半～10 月前半（3 か月間）	農業に関連する企業を中心に農業以外の企業で実習する。（例：食品メーカーの加工現場での実習、食品スーパーでの店頭販売の実習等。）講義で学ぶ経営やマーケティング等を企業の現場実習を通じて学ぶことを目的とする。企業での実習を通じて農業の新たな価値・可能性と課題を発見し、卒業後の農業経営に向けて、自らのあり方を見極める。
ゼミ	学年別ゼミ	120	4	2 年間を通じて 週 1 ～ 2 回程度 (現地実習期間を除く)	先進的農業経営の実践事例や先進的農業技術の導入事例、地域農業の活性化や地域資源を活かした地域づくり、食料・農業・農村の様々な課題等について、少人数のゼミ形式で学生の発表を中心とした事例研究等を行い、学生主体の調査研究、発表、討議等を繰り返すことにより、将来の経営者、地域リーダーとしての情報収集・分析能力、企画力、行動力、合意形成能力等の涵養を図る。
	合同ゼミ	60	2		
総合的学習		90	3	1 年次後期～2 年次前期 週 1 回程度	学生が講義や現地実習等で得た興味・関心に基づき、創意工夫を生かした教育活動を行う。（例：学生が各講義や実習で学んだ知識や経験を総合的に生かし、模擬経営を行う等。）これらにより、学生の課題解決能力を育成する。
卒業研究		150	5	2 年次後期 卒業前 4 か月間	2 年間で学んだことの集大成として、卒業後に自らの農業を実践する上で必要となる経営計画を作成する。その過程で、食や農業に関わる新しいビジネスモデルの提案等、学生自らの関心に即した調査研究を行う。
特別講義		180	6	2 年間を通じて 週 1 回程度 (現地実習期間を除く)	農業界、産業界、学界等、各界で活躍する多彩な講師を招聘し、講義及びディスカッションを行う。（例：農業経営者を招聘する「わが経営を語る」、食品関連等企業経営者を招聘する「学生に伝えたい私からのメッセージ」、「食品・流通企業最前線」、学生の希望する各界講師を招聘する「この人の話を聴きたい」等。）
特別活動	体育的活動	60	2	2 年間を通じて 月 1 回程度 (現地実習期間を除く)	体育的活動として、体力トレーニング、球技、ダンス、ヨガ、武道などの中から実施可能なものを適宜、月 2 ～ 3 回程度の頻度で行う。
	文化的活動	60	2	2 年間を通じて 月 1 回程度 (現地実習期間を除く)	文化的活動として、美術展や古典芸能の鑑賞、音楽活動、座禅、書道、華道、茶道、棋道などの中から実施可能なものを適宜、月 2 回程度の頻度で行う。
	視察研修	40	—	1 年次・6 月（4 泊 5 日）	1 年次前期（6 月）に 4 泊 5 日で、先進農業経営体等の現地視察等を行う。
	学校行事	140	—	随時	入学式、派遣実習決意表明、派遣実習報告会、卒業研究発表会、卒業式のほか、球技大会、ハイキング、登山等の学校行事を行う。

経営力領域シラバス

(領域) 経営力		(学群) 経営力入門	
(科目名) マーケティング入門		単位数 開講期	1 単位 1 年次 前期
担当講師	松尾 和典 〔日本農業経営大学校 専任講師〕 折笠 俊輔 〔(公財) 流通経済研究所 主任研究員〕		
授業のねらい	本講義では、マーケティングの定義や考え方を中心に、基本的な知識を確認する。		
授業の概要	経営領域のコアとなるマーケティングの入門的な講義を実施する。さまざまなケースを中心にマーケティングの成功要因を自ら考えることに重点を置く。また、マーケティングに携わっている実務家を招聘し、実践的な話を聴く機会を設ける。		
授業計画	第1講 マーケティングとは何か 第2講 マーケティング発想 第3講 マーケティングの基本的な用語と意味合い 第4講 製品とブランド 第5講 マーケティング・コミュニケーション 第6講 プライシング 第7講 ケース・スタディ① 第8講 ケース・スタディ② 第9講 ケース・スタディ③ 第10講 ソーシャル・マーケティングについて		
履修上の注意 (準備学習等)	特になし		
教科書	井関利明, 山田眞次郎. 思考：日本企業再生のためのビジネス認識論. 株式会社学研パブリッシング, 東京, 2013		
参考書	特になし		

(領域) 経営力		(学群) 経営力入門	
(科目名) 農業簿記		単位数 開講期	2 単位 1 年次 前期・後期
担当講師	野島 一彦 [学校法人大原学園 簿記講座教務部 部長代理] 西山 由美子 [税理士、にしやまゆみこ税理士事務所 所長]		
授業のねらい	農業経営に必要な、日常の帳簿記帳から決算までの会計・税務(所得税)に関する知識を習得し、農業簿記の特徴を理解することで、財務諸表を農業経営に生かす基礎知識を身につけることを目的とする。		
授業の概要	農業簿記検定の教科書・問題集を使用して、簿記の基本から、農業特有の取扱いを踏まえた日常的な記帳、決算時の会計処理、財務諸表の作成までを演習を多く取り入れながら学習し、1 年次前期において農業簿記検定 3 級試験の合格を目指す。また、税務上の取扱いのうち、農業特有の内容を学習する。第17講以降は後期プログラムとし、2 年次前期の農業簿記検定 2 級試験合格に向けた学習を行う。		
授業計画	第1講 農業簿記検定 3 級 第1章 農業簿記の概要 [野島] 第2講 同第2章 (1)取引とは (2)仕訳と転記 [野島] 第3講 同 (3)仕訳帳と総勘定元帳 [野島] 同 (4)伝票による仕訳と総勘定元帳への転記 [野島] 第4講 同 (5)主要簿と補助簿 (6)試算表の作成 [野島] 第5講 同第3章 勘定科目 [野島] 第6講 同第4章 農業の収益 [野島] 第7講 同第4章 農業の費用 第5章 現金、現金過不足 [野島] 第8講 同第5章 小口現金、普通預金、売掛金 [野島] 第9講 同 棚卸資産1・その他の流動資産、流動負債、資本金 [野島] 第10講 同第6章 有形固定資産、修繕費と資本的支出、売却 [野島] 第11講 同第7章 棚卸資産2 [野島] 第12講 同第7章 減価償却 [野島] 第13講 同第7章 貸し倒れ、繰り延べ、見越し [野島] 第14講 同第7章 簿記一巡の流れ、事業主勘定 [野島] 第15講 3 級 確認テスト解説 [野島] 第16講 3 級 まとめ講義 [野島] 第17講 所得税の概要、青色申告決算書 [西山] 第18講 法人の決算書概要 農業簿記検定 2 級 第4章 準備金 第7章 交付金・補填金 [西山] 第19講 同第3章 減価償却(復習)・圧縮記帳・リース取引 [西山] 第20講 同第7章 消費税 [西山]		
履修上の注意 (準備学習等)	電卓を持参のこと。毎回の授業後には復習を重点的に行い、教科書に記載の設例(次の取引の仕訳を行いましょう)を3回以上解くこと。 第15講確認テスト解説は、事前に確認テストを解き、当日はその内容を解説する。		
教科書	『農業簿記検定教科書 3 級 (第2版)』、『農業簿記検定問題集 3 級 (第2版)』 『農業簿記検定教科書 2 級 (第3版)』、『農業簿記検定問題集 2 級 (第3版)』 全国農業経営コンサルタント協会/学校法人大原学園大原簿記学校 (大原出版) 『農業簿記検定過去問題集 3 級』日本ビジネス技能検定協会		
参考書	なし		

(領域)	経営力	(学群)	経営戦略	
(科目名)	農業・食の経営戦略		単位数 開講期	2 単位 1 年次 前期・後期
担当講師	上原 征彦 〔昭和女子大学 現代ビジネス研究所 特命教授〕			
授業のねらい	本講義では、農業経営における競争優位を見出し、事業を維持・拡大していくための戦略を立案し、意思決定をしていくための力、それを実行に結びつける力を身に付けることを目的とする。			
授業の概要	経営を展開していく上で、必要な戦略を策定・遂行・評価するプロセスについての基礎的な理論と、その応用を学ぶ講義である。 本講義の前半は、一般の経営戦略論で培われた有効な理論を学び、次にこれを踏まえつつ、ケースメソッドを活用して実践に応用する力を養う。後半では、上記で学んだことを農業経営に活用していく場面を想定し、そこから実践的な定石を習得していく。ここでは、農業経営について、様々な角度から受講者と教師とのディスカッションを深めつつ、より現実的な問題にアプローチしていく。本講義では、農業経営が抱える現実の問題点とその解決方法について多様なアイデアを創出することに特に力を入れたい。			
授業計画	<前期> 第1講 農業と食に関する経営戦略とは何か 第2講 マーケティングの農業経営における位置づけ 第3講 環境分析と経営資源分析 第4講 コアコンピタンスと強みの構築 第5講 農業・食での競争をどう展開するか 第6講 日本農業の発展段階とこれから 第7講 顧客志向型農業経営をどうデザインするか 第8講 農業経営者はどうあるべきか 第9講 農業経営のためのブランド戦略 第10講 農業経営のグローバル化と競争 <後期> 第1講 食の産業構造とその変化 第2講 食の流通とその変化 第3講 食と農業の関連づけ 第4講 経営とブランド戦略 第5講 地域ブランドの論理 第6講 農業経営の多角化 第7講 ビジネスからみた農業 第8講 政府の政策と農業 第9講 農業経営者の資質 第10講 IT化と農業経営			
履修上の注意 (準備学習等)	前回の授業を理解していることを前提に次回の授業を行なうので、必ず復習をしておくこと。			
教科書	上原征彦・他 (2015) 『農業経営：新時代を切り開くビジネスデザイン』丸善出版			
参考書	上原征彦 (1999) 『マーケティング戦略論』有斐閣			

(領域) 経営力	(学群) 経営戦略		
(科目名) 農業経営学		単位数 開講期	1.5単位 1年次 前期
担当講師	南石 晃明 [九州大学大学院農学研究院教授] ほか		
授業のねらい	本科目では、学際的・国際的な視野に立って農業経営発展に資する経営管理の理論と方法について学ぶ。農業は地域に根差した産業であるが、次世代の農業経営には、他産業や海外農業の動向・発展方向についても理解をし、地球的・長期的な視点から経営戦略の策定とその効果的な実行を行うことが求められている。そこで、多様な農業経営の発展過程とその経営管理について、理論および方法の両面から理解すると共に、実践的な農業経営管理手法を身に付けることを目的とする。		
授業の概要	本科目では、まず、農業経営の多様性、経営発展、経営戦略について概説すると共に、農業経営環境の変化と次世代農業経営について述べる。さらに、農業経営の目的と資源について述べた後、実践的な農業経営手法の基礎となる農業経営計画と意思決定の理論について概説する。また、「農業経営の見える化」「農作業の見える化」、「IT農業」といった農業経営における情報マネジメントの具体例を通して、農業経営におけるリスク、情報、人材のマネジメントについて理解を深める。 その後、多様な先進的農業経営の事例として、家族経営、家族経営から発展した企業経営、企業の農業参入、さらに、可能な範囲で海外の農業経営を取り上げて、その経営戦略と経営管理について述べる。最後に、次世代の農業経営の展望について学ぶ。なお、実践的な内容とするため、先駆的な農業経営者をゲスト講師とすると共に、演習的な内容も取り入れた授業を行う。		
授業計画	第1講 農業経営の発展と戦略1 第2講 農業経営の発展と戦略2 第3講 農業経営計画と経営意思決定1 第4講 農業経営計画と経営意思決定2 第5講 農業経営情報マネジメントの基礎1 第6講 農業経営情報マネジメントの基礎2 第7講 家族農業経営の発展と経営管理の実践1 第8講 家族農業経営の発展と経営管理の実践2 第9講 農業新規参入経営の発展と経営管理の実践1 第10講 農業新規参入経営の発展と経営管理の実践2 第11講 企業農業経営(土地利用型)の発展と経営管理の実践1 第12講 企業農業経営(土地利用型)の発展と経営管理の実践2 第13講 企業農業経営(施設園芸)の発展と経営管理の実践1 第14講 企業農業経営(施設園芸)の発展と経営管理の実践2 第15講 次世代農業経営のビジョン (注意：ゲスト講師の都合により、講義の順番は変わる可能性がある)		
履修上の注意 (準備学習等)	農業および農業経営について基礎的な理解をしていることを前提に授業を行うため、参考図書を活用して、問題意識をもって授業に臨むこと。		
教科書	参考書の関連章を必要に応じて配付資料とする。		
参考書	『農業におけるリスクと情報のマネジメント』南石晃明（農林統計出版） 『TPP時代の稲作経営革新とスマート農業』南石晃明ら（養賢堂） 『次世代土地利用型農業と企業経営』日本農業経営学会（養賢堂） 『農業革新と人材育成システム』南石晃明ら（農林統計出版）		

(領域) 経営力		(学群) 経営戦略	
(科目名) 情報戦略の理論と実践		単位数 開講期	1 単位 1 年次 後期
担当講師	松尾 和典 〔日本農業経営大学校 専任講師〕		
授業のねらい	本授業では、経営・マーケティング活動における情報戦略について幅広く学習し、IT 技術等を有効に活用したイノベーションの実現、顧客との新たなリレーションの構築、農産物の販売手法の拡充等、情報をいかに戦略的に活用していくかを実践的に学習することを目的としている。		
授業の概要	情報戦略の基礎知識の習得を優先し、その後経営戦略や IT 等へ講義内容を拡大させていく。その中で、ケース・スタディや実践者からの講義等を通じ、戦略的な情報を活用する方法を学習する。 今後の農業経営者に必須となるパブリック・リレーションズについても本講義にて取り扱う。 本講義では、グループワークの機会を多く設け、コラボレーションを推進する。		
授業計画	第1講 情報とは何か 第2講 情報戦略の概要（1） 第3講 情報戦略の概要（2） 第4講 クリエイティブ産業と情報（1） 第5講 クリエイティブ産業と情報（2） 第6講 ケース・スタディ（1） 第7講 ケース・スタディ（2） 第8講 パブリック・リレーションズ（1） 第9講 パブリック・リレーションズ（2） 第10講 情報戦略の総括と今後の展望		
履修上の注意 (準備学習等)	特になし		
教科書	特になし		
参考書	編集工学研究所（著），松岡 正剛（監修）．情報の歴史：象形文字から人工知能まで．NTT出版；増補版．1996		

(領域) 経営力		(学群) 経営戦略	
(科目名) 農業・食の経営組織		単位数 開講期	1 単位 2 年次 後期
担当講師	納口 るり子 [筑波大学生命環境系教授] ほか		
授業のねらい	本講義では、農業経営を人的組織として把握する必要性の理解から始まり、従業員の採用・研修や経営内の経営情報の集積、後継者の育成方法などについて論じていく。大規模雇用型家族経営や雇用型農業法人を想定しているため、中小企業で採用されているような人的資源管理の視点を農業経営に適用する。また、さらに、一つの経営を超えるネットワーク型の経営間組織についても考察する。農業経営は個別で経営活動を行っているのではなく、経営間の連携により成立する。そうした中間組織についても教授する。 農業経営を含む全ての経営において、人的組織をどのように形成し活性化して、高い生産力を上げていくかという点は、もっとも重要な経営管理の領域である。特に農業経営では、これまで遅れていた管理領域であり、近年、人的資源管理の重要性が増している。 本講義においては、農業法人の経営者を含む実務者による講演も想定している。		
授業の概要	授業では、経営組織に関する一般経営学の視点を導入して、農業経営における人的資源の問題を考える。雇用型家族経営、フランチャイズ型組織、ネットワーク型組織を事例に、組織の形や採用・評価・報酬などの管理面と、人的資源能力向上という形で組織に蓄積される無形資源のありかたと、農業経営における生産力の水準について実践に役立つような知見を教授する。実務者にお話しいただくことと、実務者と担当講師のやり取りを通じて、学生の理解を深める。		
授業計画	第1講 経営組織の考え方と農業の生産力形成 第2講 農業経営と人的組織を巡る社会・経済的背景 第3講 雇用型家族経営における経営組織 (1) 第4講 雇用型家族経営における経営組織 (2) 第5講 雇用型農業法人の従業員育成方策 (1) 第6講 雇用型農業法人の従業員育成方策 (2) 第7講 雇用型農業法人のパート従業員労務管理 第8講 雇用型農業法人のパート従業員労務管理 第9講 ネットワーク型組織の特徴と経営管理 (1) 第10講 ネットワーク型組織の特徴と経営管理 (2)		
履修上の注意 (準備学習等)	特になし		
教科書	特に指定しない。必要に応じて資料を配付する。		
参考書	『組織論 補訂版』桑田耕太郎、田尾雅夫 (有斐閣アルマ、2010年) 『人的資源マネジメント戦略』高木晴夫監修 (有斐閣、2004年) 『農業経営の新展開とネットワーク』金沢夏樹・納口るり子・佐藤和憲編 (農林統計協会、2005年) 『日本の新しい農業経営の展望—ネットワーク型農業経営組織の評価—』門間敏幸編著 (農林統計協会、2009年)		

(領域)	経営力	(学群)	流通・マーケティング
(科目名)	消費者の心理と行動	単位数 開講期	1 単位 1 年次 前期
担当講師	神谷 渉 [玉川大学経営学部国際経営学科准教授]		
授業のねらい	本講義では、消費者が買物や、所有、商品の使用といった消費活動を行う際に、どのような要因が存在するのか、それらはどのように影響し合うのか、それらによってどのような結果が生じるかについて学ぶ。		
授業の概要	まず消費者行動とマーケティングとの関係をはじめ、消費者の心理や行動を知ることがどうして重要なのかを説明する。次に、消費者の購買意思決定プロセスに沿って消費者の行動に至るプロセスを学ぶ。その中では、どのようにして行動が起こされるのか、記憶される情報とはどのようなものか、満足とは何なのか、ライフスタイルや個人の属性が消費にどのような影響をもたらすのかといったことについて触れる。 並行して、消費者の心理や行動を把握するための手法として、マーケティングリサーチについて触れる。手法について説明した後、簡単な実習を通じて基礎の習得を目指す。		
授業計画	第1講 消費者の行動と心理、マーケティングリサーチの基礎 第2講 消費者の購買意思決定プロセス①：問題認識と動機付け 第3講 消費者の購買意思決定プロセス②：情報探索と記憶・知覚プロセス 第4講 消費者の購買意思決定プロセス③：代替案選択と購入、購買後評価 (課題) 質問紙の作成 第5講 マーケティングリサーチの実践：質問紙の改善 第6講 マーケティングリサーチの実践：集計・分析の方法 (課題) アンケートの実施と集計 第7講 マーケティングリサーチ課題の発表と講評 第8講 消費者の行動/心理の実務的応用		
履修上の注意 (準備学習等)	・ マーケティングリサーチの実践として、実際にアンケートの実施・結果報告をしてもらうので、指示する授業外の課題を行ってこること。 ・ あくまで概要の講義であるため、より深く学習したい人は参考書を読み進めることを推奨する。		
教科書	特に指定しない。プリント等を配付する。		
参考書	『消費者行動の知識 (日経文庫)』 青木 幸弘 (日本経済新聞出版社) 『消費者行動論—マーケティングとブランド構築への応用 (有斐閣アルマ)』 青木 幸弘、他 (有斐閣) 『アンケート調査入門』 朝野 熙彦 (東京図書)		

(領域) 経営力	(学群) 流通・マーケティング
(科目名) 食農連携マーケティング	単位数 開講期 2単位 1年次 後期
担当講師	三村 優美子 [青山学院大学経営学部教授] ほか ※テーマに合わせて実務家を招聘する
授業のねらい	今、従来の大量生産・大量販売を背景としたプロダクト（工業製品）ベースではなく、顧客視点を強調したマーケティング、さらに文化や伝統、地域社会の繋がりを重視したサービス価値ベースのマーケティングが注目されている。本講義では、自然景観、風土、食文化、そして農業との一体化を目指すイタリアやフランスの農村地域に代表されるような、地域社会・農業の価値を活かす新しいマーケティングの枠組みを理解し身に付けることを目的とする。
授業の概要	本講義では、地域社会・農業の価値を活かすマーケティングを食農連携マーケティングとした上で、その基本的な考え方から、実践に至るまで、事例研究、実務家による講演や討議を通じて学ぶ。 まず、マーケティングの基本的な視点や考え方を確認したうえで、地域共生を目指す新しいマーケティングが登場している背景や理由を、消費社会や流通の変化と関連づけて説明する。ここでは、顧客関係、ブランド、マーケティング・コミュニケーション、経験価値、価値共創の取り組みなど、食農連携を進めるために重要な鍵概念に注目する。そして日本のスローフードや地域ブランド構築を試みている事例を取り上げ、その可能性や課題について理解を深める。最後に食農連携マーケティングをどう進めるかについてグループによる企画提案を予定している。
授業計画	第1講 オリエンテーション [内容]全体を統括した話+問題提起 <食農連携マーケティングの基本的考え方> 第2講 サービス価値ベースのマーケティング登場の背景とその考え方 第3講 変わる消費社会と生活価値観（消費文化・社会的視点から） 第4講 顧客起点と顧客との関係づくり 第5講 ブランド化はなぜ必要なのか 第6講 経験価値のマーケティングについて 第7講・第8回 食農連携マーケティングの実践事例の研究 第9講 生活者の視点から食を考える 第10講 農業における地域ブランドの有効性について 第11講・第12講 食農連携マーケティングの提案（グループ研究）① 第13講・第14講 食農連携マーケティングの提案（グループ研究）② 第15講・第16講 食農連携マーケティングの提案（グループ研究）③ （中間まとめ） 第17講・第18講 食農連携マーケティングの提案（グループ研究）④ 第19講・第20講 まとめ（グループ研究の最終報告と総合討議）
履修上の注意 (準備学習等)	「マーケティング入門」を習得し、マーケティングについての基礎知識を踏まえたうえで、授業に臨むこと。

教科書	特に指定しない。必要に応じてプリント等を配付する。
参考書	『マーケティングを学ぶ』 石井淳蔵（ちくま新書） 『老舗ブランド「虎屋」の伝統と革新』 長沢伸也・染谷高士（晃洋書房） 『第四の消費—つながりを生み出す社会へ』 三浦展（朝日新書） 『地域ブランドマネジメント』 電通abic project編（有斐閣） 『なぜイタリアの村は美しく元気なのか』 宗田好史（学芸出版社）

(領域) 経営力		(学群) 流通・マーケティング	
(科目名) 食品流通論		単位数 開講期	1 単位 1 年次 後期
担当講師	大塚 明 〔前 日本スーパーマーケット協会専務理事〕 高橋 佳生 〔(公財)流通経済研究所常務理事〕		
授業のねらい	流通とは生産と消費の隔たりを橋渡しするための多様な社会的・経済的な活動である。日本の流通は先進諸外国と比較して幾つかの異なる特徴を持っており、一時、非関税障壁といわれることもあった。本講義では、流通の定義・概念について述べ、流通が果たす社会的な役割、流通の機能について、具体的な事例を交えて解説し、その基本を学ぶ。さらに講義内では、消費財全般の流通チャネルの変革や、国際化、法規制といった最新のトレンドにも触れていく。また、農業・食品産業にかかわる流通についての講義も実施することで、農業経営者として実務で活用できる知識の習得を目指すものとする。		
授業の概要	流通には、生産者と消費者とが異なるという隔たりを取引で架橋する商流、生産する場所と消費する場所を結びつける物流、生産と消費の間で情報の受け渡しを担う情報流が含まれる。 本講義では、まず、こうした流通の基本的な概念・機能を述べ、流通の中心となる商業およびその中の小売業、卸売業の概念と構造について解説する。続いて、近年のネット流通の進展や規制緩和が流通の仕組みや活動にもたらす変化、大手メーカーによるブランド戦略、マーケティング・チャネルの形成、流通の国際的な標準化といったことについて論じていく。消費財、特に加工食品・農産物の領域を中心に授業を進める。		
授業計画	第1講 流通・商業とは／商品別の流通 [高橋] 第2講 商流 [高橋] 第3講 物流・情報流 [高橋] 第4講 卸売業の特性と発展の歴史 [高橋] 第5講 メーカーのブランド・流通戦略 [高橋] 第6講 流通関係の公的規制／独占禁止法 [高橋] 第7講 小売業の特性と発展の歴史 [大塚] 第8講 食品小売業の戦略 [大塚] 第9講 農産物流通のトレンド（6次産業化） [高橋] 第10講 今後の日本市場と流通（縮む市場・伸びる市場・需要の変化） [高橋]		
履修上の注意 (準備学習等)	「マーケティング入門」を理解していることを前提に授業を行う。		
教科書	『現代流通』矢作敏行（有斐閣アルマ）		
参考書	『ゼミナール 流通入門』田島義博／原田英生編（日本経済新聞社） 『流通機構の話』田島義博（日経文庫）		

(領域)	経営力	(学群)	会計・マネジメント	
(科目名)	農業経営の会計・ファイナンス		単位数 開講期	2 単位 1 年次後期・2 年次前期
担当講師	森 剛一 [税理士、アグリビジネス・ソリューションズ(株)代表取締役]			
授業のねらい	農業経営を数字によって把握するとともに、金融機関などの利害関係者に的確に説明できる能力を磨く。また、農業経営を発展させるための経営計画を策定するスキル、的確な投資判断や資金調達をするための手法を身に付けることを目的とする。			
授業の概要	この授業では、まず、生物を対象としたものづくりとしての農業の会計の特徴、農畜産物の原価計算のしくみを理解する。次に、モデルとなる農業法人の財務諸表を題材とした演習方式により、経営の課題について受講生どうしの討議を行うことで、財務諸表の見方や経営分析の手法を学ぶ。また、融資、投資の違いなど資金調達に必要な知識とスキルを習得し、実践的な経営計画の策定とその運用のポイントについて学ぶ。			
授業計画	第1講・第2講 農業簿記の基礎、記帳体系、農業の会計に関する指針 第3講・第4講 材料費会計、労務費会計、経費会計 第5講・第6講 部門別計算、製品別計算 第7講・第8講 農企業の財務諸表、決算、農業法人標準勘定科目 第9講・第10講 標準原価計算、原価・生産規模・利益関係の分析、短期利益計画、直接原価計算 第11講・第12講 簿記一巡の手続き、伝票会計、パソコン会計 第13講・第14講 固定資産・繰延資産、引当金・準備金、その他の取引、設備投資の判断 第15講・第16講 株式会社、農事組合法人、経営分析 第17講・第18講 資金管理、キャッシュフロー計算書、収入保険制度 第19講・第20講 資金調達、農業金融、農業投資			
履修上の注意 (準備学習等)	農業簿記3級の簿記の知識を理解していることを前提に授業を行う。また、農業簿記2級レベルについても事前に学習のうえ授業に臨むこと。			
教科書	『農業簿記検定教科書2級』全国農業経営コンサルタント協会・大原簿記学校(大原出版) 必要に応じてプリント等を配布する。			
参考書	『農業簿記検定問題集2級』全国農業経営コンサルタント協会・大原簿記学校(大原出版)			

(領域) 経営力	(学群) 会計・マネジメント		
(科目名) コーポレート・ファイナンス	単位数 開講期	1 単位 2年次 後期	
担当講師	竹林 陽一 [(株) クリエイティブ・ジャングル 代表取締役社長]		
授業のねらい	本講義では、ファイナンスの理論を学び、ファイナンスが企業にとっての「未来」に焦点を置いていることを確認する。資金調達や資金運用に関する知識を獲得し、企業価値を最大化する考え方を学ぶとともに、経営者として意思決定を行う力を醸成することを目的とする。		
授業の概要	ファイナンスに関わる必要知識から、起業する上で必要となる実務までを学ぶ。具体的には、金融業界の構造や足許の動向からファイナンスを俯瞰することに始まり、企業経営に必要となるキャッシュフロー・マネジメントや企業の価値評価の算定手法といったディテールを学ぶこととする。その後、こうした学びを基盤として、実際の事業計画や資本政策の立案、資金の調達や運用の実務についても学んでいく。		
授業計画	第1回 ファイナンスを取り巻く構造 第2回 キャッシュフロー・マネジメント 第3回 資本と負債 第4回 資本コスト 第5・6回 企業価値評価 第7回 事業計画 第8回 資本政策 第9回 資金調達の実務 第10回 運用		
履修上の注意 (準備学習等)	特になし		
教科書	特になし		
参考書	起業のファイナンス (磯崎哲也) 日本実業出版社		

(領域) 経営力		(学群) 会計・マネジメント	
(科目名) 農業におけるリスク管理		単位数 開講期	1 単位 2 年次 前期
担当講師	池戸 重信 〔宮城大学名誉教授、(一社)日本農林規格(JAS)協会会長〕		
授業のねらい	農業は自然を相手に生きものを生産する産業であるから、2 次、3 次産業以上に多様なハザード (危害) が存在し、リスクにさらされる。一般の企業では近年、経営上の課題 (のひとつ) として、リスク分析手法に基づく (リスク) 管理が重要な位置づけとなっているが、農業においても今後、経営規模が大きくなり、6 次産業化によって事業内容も複雑化するにつれ、リスク管理が経営の命運を左右する可能性が拡大する。この授業では主要なリスクとそれへの対処方法を習得する。		
授業の概要	生産から消費に至るフードチェーン全体におけるリスク分析手法の概念を理解するとともに、特に多様な危害 (ハザード) にさらされる農業におけるリスク要因とその管理法を習得する。具体的には、主要なリスクごとに、その内容と発生原因、消費者への影響、関係する規制等を理解するとともに、消費者に対する安心 (信頼) 対策としての表示制度や監視機関での現地検討を行う。		
授業計画	第1講 リスク分析とその要素 (リスクゼロ行政からリスク分析行政への転換と行政組織体系) 第2講 食品の安全性と安心 (信頼) との関係 (食中毒実態と消費者との意識ギャップ) 第3講 食の安全・安心に関する法的位置づけ (食品安全基本法等関連法令の基本理念) 第4講 安全性確保手法と基準・制度の国内外の動向 (HACCP, GAP, ISO, Codex等の管理手法と国内外の制度) 第5講 食品の表示① (我が国表示制度の変遷) 第6講 食品の表示② (新食品表示法と今後の展開) 第7講 トレーサビリティの定義と機能 (トレーサビリティの機能・役割と内外動向) 第8講 食品の安全・安心監視手法 (各種機器分析と疑和鑑別法) 第9講 食の安全・安心に対する監視体制① (監視機関 (FAMIC) での現地検討) 第10講 食の安全・安心に対する監視体制② (監視機関 (FAMIC) での現地検討)		
履修上の注意 (準備学習等)	1 年次の授業を理解していることを前提に授業を行う。 また、販売されている種々の食品の表示について観察し、疑問や問題点を整理しておくこと。		
教科書	(調整中)		
参考書	(調整中)		

(領域) 経営力		(学群) 会計・マネジメント	
(科目名) 農業経営の社会的責任		単位数 開講期	1 単位 2年次 後期
担当講師	未定〔未定〕		
授業のねらい	本講義では、経営を実践していくなかで求められることになる社会的責任がより戦略的になり、同時に長期的な取り組みとして、経営における大きな課題となってきたことを確認し、今後の戦略として、どのような選択が考えられるか、を目的としている。		
授業の概要	企業の社会的責任のあり方を確認した上で、コーズ・リレーテッド・マーケティングやフィランソロピー、ソーシャル・イノベーション等の動向を追いながら、次世代型の経営モデルとして注目を集めるCSV（共通価値の創造）も視野に入れる。企業は社会的課題を解決することで、経済価値を増大できる。慈善事業や非営利事業ではなく、本業としての経営戦略に組み込むことで初めて実現できるとされているのである。		
授業計画	第1講 会社は誰のためにあるのか 第2講 企業の社会的責任活動の歴史 第3講 コーズ・リレーテッド・マーケティングとその事例 第4講 フィランソロピー活動 第5講 社会起業家の登場とソーシャル・イノベーション (1) 第6講 社会起業家の登場とソーシャル・イノベーション (2) 第7講 CSV（共通価値の創造） (1) 第8講 CSV（共通価値の創造） (2) 第9講 農業経営の社会的責任とは何か 第10講 ディスカッションと総括		
履修上の注意 (準備学習等)	特になし		
教科書	特になし		
参考書	特になし		

(領域) 経営力		(学群) 会計・マネジメント	
(科目名) 経営者の法律		単位数 開講期	1 単位 2 年次 後期
担当講師	須藤 英章 [弁護士、東京富士法律事務所代表] 足立 学 [弁護士、東京富士法律事務所] 須賀 一也 [公認会計士、須賀公認会計士事務所代表]		
授業のねらい	本科目では、事業の展開や組織の運営を行う際に直面する、経営者として最低限身に付けておくべき法律知識の習得を目的とする。		
授業の概要	授業では、民法を中心に各種契約の概念につき、法律の条文や判例等を織り交ぜながら、実際の農業経営での活用を前提に学ぶ。さらに、税法の基礎について学習する。 なお、授業の習得度合い等を確認する観点から、復習材料として、適宜ケーススタディを活用したレポートを課す。		
授業計画	第1講 契約法 (1) [須藤・足立] 第2講 契約法 (2) [須藤・足立] 第3講 保証と担保 (1) [足立] 第4講 保証と担保 (2) [足立] 第5講 契約法・事例演習 (1) [足立] 第6講 契約法・事例演習 (2) [足立] 第7講 相続、事業承継 (1) [足立] 第8講 相続、事業承継 (2) [足立] 第9講 農業経営と税務 (1) 基礎編① [須賀] 第10講 農業経営と税務 (2) 基礎編②+ケーススタディ [須賀]		
履修上の注意 (準備学習等)	特になし。		
教科書	『実践企業法務入門第5版』滝川宜信著 (民事法研究会) その他、必要に応じてプリント等を配付する。		
参考書	特に指定しない。		

(領域)	経営力	(学群)	事業創造・イノベーション		
(科目名)		ナレッジマネジメント		単位数 開講期	1 単位 1 年次 後期
担当講師		梅本 勝博 〔北陸先端科学技術大学院大学知識科学研究科名誉教授〕			
授業のねらい		組織経営における知のマネジメントの理論的枠組みと実践方法について理解する。 それと並行して、ビジネスモデルという知識を創造する。			
授業の概要		経営を知の創造・共有・活用のプロセスとして捉え、その理論的モデルと実践戦略・手法、情報技術の活用、場の役割などを論じながら、それと並行して、事業創造のためのビジネスモデルという知識を創造するための方法論を学ぶ。さらに、農業のサービス化と顧客との価値の共創の重要性についても学ぶ。			
授業計画		第1回 ナレッジマネジメントとは何か（1） 第2回 知識としてのビジネスモデルの創造（1） 第3回 ナレッジマネジメントとは何か（2） 第4回 知識としてのビジネスモデルの創造（2） 第5回 場とナレッジマネジメント戦略 第6回 知識としてのビジネスモデルの創造（3） 第7回 知識から価値へ：農業のサービス化 第8回 知識としてのビジネスモデルの創造（4） 第9回 課題発表 第10回 課題発表			
履修上の注意 (準備学習等)		自分が実現したい農業経営の将来像を現実のものにするためにはどうすればよいか、に関する課題を4つ出すので、締め切りまでに提出すること。その課題に答えるために必要なことは授業で教える。			
教科書		特に指定しない。必要に応じてプリント資料等を配付する。			
参考書		『知識創造企業』 野中郁次郎・竹内弘高（共著）梅本勝博（訳）東洋経済新報社			

(領域) 経営力		(学群) 事業創造・イノベーション	
(科目名) イノベーション実践論		単位数 開講期	1 単位 2 年次 前期
担当講師	丹羽 清 [東京大学名誉教授]		
授業のねらい	イノベーション（新軌道への変更、あるいは、創造的破壊）とは何か、そして、なぜそれが必要かという基本的な考え方を理解し、その上で、イノベーション実現上の主要な課題とその解決の方法を習得して、受講生がイノベーション実現に向けて挑戦できる能力と意欲を向上させることを目的とする。		
授業の概要	受講生がイノベーションを実際に起こすにはどうすればよいのかという実践的課題を扱う。まず、イノベーションの基本的考え方を理解して、それらを実践する際の応用上の課題を議論する。ついで、複数の人間からなる組織の中でイノベーションを実際に起こそうとする際の困難さを明らかにして、それらの解決の方法を議論する。さらに、異なった業務を担当する種々の人々と、いかに協力して総合力を発揮しイノベーションを起こすべきか、その展開の方法とマネジメントの在り方を議論する。		
授業計画	第1講 イノベーションとは何か 第2講 創造的破壊とは何か 第3講 個人と組織のイノベーション 第4講 「自分たちで起こしたいイノベーションの提案」グループ討議 第5講 「自分たちで起こしたいイノベーションの提案」全体討議 第6講 既存組織でイノベーション 第7講 総合化によるイノベーション 第8講 「ブルーオーシャン、又は、総合化イノベーション提案」グループ討議 第9講 「ブルーオーシャン、又は、総合化イノベーション提案」全体討議 第10講 「ブルーオーシャン、又は、総合化イノベーション提案」全体討議		
履修上の注意 (準備学習等)	クラスでの議論を中心に授業を進めるので、完全出席が必要。		
教科書	『イノベーション実践論』丹羽清（東京大学出版会、2010）		
参考書	『技術経営論』丹羽清（東京大学出版会、2006） 『技術経営の実践的研究：イノベーション実現への突破口』 丹羽清編（東京大学出版会、2013）		

(領域) 経営力		(学群) 事業創造・イノベーション	
(科目名) アントレプレナー論		単位数 開講期	0. 5単位 2年次 後期
担当講師	講師未定		
授業のねらい	本講義では、アントレプレナーの考え方・取り組み方について学ぶ。 特に創業者としての経営理念、経営指針、経営戦略の組み立てや、意思決定、人材採用・育成について、経営の実践者を通じて論じていく。		
授業の概要	講義は、実際の経営者の講義も交えて進めていく。経営者としての経営理念、経営指針、意思決定、人材マネジメント、地域性を活かす経営、その課題と解決方向(資源不足、事業承継、事業リスクの集中等)について学ぶ。また、アントレプレナーといっても、ファウンダーのみに留まらず、経営を継承し、新規に事業を発展させる第2創業や第3創業といった視点でもゲストを招聘し、実践事例について言及する。 また、ゲスト講師と学生、学生間でのディスカッション時間を積極的に設け、自身が経営を実践していくとすのために、学びを深める。		
授業計画	第1講 アントレプレナーシップとは何か 第2講 ケース・スタディ・ディスカッション① 第3講 ケース・スタディ・ディスカッション② 第4講 ケース・スタディ・ディスカッション③ 第5講 グループワーク 第6講 総括と展望		
履修上の注意 (準備学習等)	特になし		
教科書	特になし		
参考書	特になし		

(領域)	経営力	(学群)	事業創造・イノベーション
(科目名)	農業経営改革実践論	単位数 開講期	1 単位 2 年次 前期・後期
担当講師	近藤 修司 〔北陸先端科学技術大学院大学知識科学研究科客員教授、 (株) 四画面思考研究所代表取締役、 (株) 日本能率協会コンサルティング常任顧問〕 ほか		
授業のねらい	本講義は農業経営の改革実践を継続する視点で、改革実践力の高い人材を育成することを狙いとする。特に、人間力と技術力を駆使して、価値の創造をプロデュースできる未来創造型の改革人材を育成する。具体的には、未来を創造する 4 画面思考法とイノベーション知識を体得して、自分の改革実践提案書を構築して実践する。喜んで喜ばず、楽しんで楽しませる等の人間力向上の視点から未来創造思考を体得する。		
授業の概要	主体的に未来を創り出すという視点から経営改革事例と理論・手法を習得し、自分の改革実践提案書を構築する。経営改革実践者や経営分野・企業戦略分野などのコンサルタントが持っている「診断・課題設定・問題設定・企画構想・組織化人材育成・成果実現」の体系と経営改革実践力を習得する。講義にパソコンを持ち込み、改革データベースを提供するとともに、知識教育・実習・発表討議・改革データベースづくりを繰り返し、改革実践能力を倍増する。実際に本授業で取り上げる理論・手法を用いて経営改革をおこなっている実践者を招いての実践事例の紹介も予定している。		
授業計画	〈前期〉 第 1 講 21 世紀の価値創造と 4 画面思考による農業改革実践法の体系 第 2 講 知識創造と価値創造の 2 軸革新（革新の気づきによる改革実践法） 第 3 講 経営改革の歴史研究と SWOT 分析による現状認識法 第 4 講 兆し分析とありたい姿の表現法：先端人材の改革マインドに学ぶ （実践者による実践事例紹介：能美機器改革実践事例・本螺子製作所四画面思考事例） 〈後期〉 第 5 講 未来年表と新製品・新事業探索法（なりたい姿のデザイン） 第 6 講 楽しんで楽しませる企画実践法（実践する姿によるやり遂げる仕組み） 第 7 講 イノベーション知識データベースとの交流で改革構想を科学化する 第 8 講 改革実践事例データベースとの交流で改革構想を具体化する 第 9 講 感動する農業経営改革実践提案書のまとめ 第 10 講 感動する農業経営改革実践提案書のプレゼンテーション及び気づき交流		
履修上の注意 (準備学習等)	気づきメモ・未来ファイル・マイデータベース・YWT 振り返りなど、進化し続ける四画面思考と行動法を習慣化する。		
教科書	『4 画面思考の基本』近藤修司（四画面思考研究所、2009）		
参考書	『技術マトリックスによる新製品新事業探索法』近藤修司（日本能率協会） 『パソコンひらめき術』近藤修司（光文社）		

農業力領域シラバス

(領域)	農業力	(学群)	農業力入門																															
(科目名)		日本農業論	単位数 開講期	1 単位 1 年次 前期																														
担当講師		小口 広太〔日本農業経営大学校専任講師〕																																
授業のねらい		農業の役割は、健康な食べものを生産し、人間の生命を支えることである。その成立条件は、「自然」と「地域（＝消費者）」との共生にある。つまり、農業経営には自然と暮らしを有機的につなぎ、生命の再生産と持続可能な社会の礎を構築していくことが必要となる。 このような問題意識のもと、本講義では座学と現地視察を組み合わせながら、日本農業の特質を紐解き、普遍的な農業の価値について考える。																																
授業の概要		【第1 講・第2 講】 農業が永続する条件を農業技術の観点から分析した後、自然と共生する日本型農業の特徴について解説する。 【第3 講・第4 講】 江戸時代元禄期に武蔵野台地に拓かれたた三富（さんとめ）新田（埼玉県三芳町）を視察し、地域に現存する伝統農法から循環型農業の意義を学ぶ。 【第5 講】 現地講義を振り返りつつ、自然と共生する農業技術をどのように自らの経営に取り入れていけるのかを考え、発表する。 【第6 講・第7 講】 消費者との関係性をコミュニティの観点から分析した後、都市化が最も進んだ東京農業を事例として取り上げ、その特徴と可能性を解説する。 【第8 講・9 講】 東京で有機農業を営む農家の取り組みを視察し、消費者との一体的関係性を構築する取り組みから地域に根差す農業経営の意義を学ぶ。 【第10 講】 現地講義を振り返りつつ、消費者とのコミュニケーションをどのように自らの経営に取り入れていけるのかを考え、発表する。																																
授業計画		<table><tr><td>第1 講</td><td>農業と自然の共生①</td><td>農業の永続性</td></tr><tr><td>第2 講</td><td>農業と自然の共生②</td><td>循環型農業の系譜</td></tr><tr><td>第3 講</td><td>[現地視察]</td><td>埼玉県三芳町・三富新田</td></tr><tr><td>第4 講</td><td>[現地視察]</td><td>埼玉県三芳町・三富新田</td></tr><tr><td>第5 講</td><td colspan="2">ディスカッション：自然共生型農業をどう実践するのか</td></tr><tr><td>第6 講</td><td colspan="2">農業と地域の共生①：強いコミュニティと弱いコミュニティ</td></tr><tr><td>第7 講</td><td colspan="2">農業と地域の共生②：都市農業の意義と可能性</td></tr><tr><td>第8 講</td><td>[現地視察]</td><td>東京の有機農業者</td></tr><tr><td>第9 講</td><td>[現地視察]</td><td>東京の有機農業者</td></tr><tr><td>第10 講</td><td colspan="2">ディスカッション：消費者とどう向き合うのか</td></tr></table>			第1 講	農業と自然の共生①	農業の永続性	第2 講	農業と自然の共生②	循環型農業の系譜	第3 講	[現地視察]	埼玉県三芳町・三富新田	第4 講	[現地視察]	埼玉県三芳町・三富新田	第5 講	ディスカッション：自然共生型農業をどう実践するのか		第6 講	農業と地域の共生①：強いコミュニティと弱いコミュニティ		第7 講	農業と地域の共生②：都市農業の意義と可能性		第8 講	[現地視察]	東京の有機農業者	第9 講	[現地視察]	東京の有機農業者	第10 講	ディスカッション：消費者とどう向き合うのか	
第1 講	農業と自然の共生①	農業の永続性																																
第2 講	農業と自然の共生②	循環型農業の系譜																																
第3 講	[現地視察]	埼玉県三芳町・三富新田																																
第4 講	[現地視察]	埼玉県三芳町・三富新田																																
第5 講	ディスカッション：自然共生型農業をどう実践するのか																																	
第6 講	農業と地域の共生①：強いコミュニティと弱いコミュニティ																																	
第7 講	農業と地域の共生②：都市農業の意義と可能性																																	
第8 講	[現地視察]	東京の有機農業者																																
第9 講	[現地視察]	東京の有機農業者																																
第10 講	ディスカッション：消費者とどう向き合うのか																																	

履修上の注意 (準備学習等)	特になし
教科書	特になし ＊レジュメや関連資料等、必要に応じて配付する。
参考書	明峯哲夫『明峯哲夫著作集 生命を紡ぐ農の技』（2016年、コモンズ）

(領域) 農業力		(学群) 生物と農業	
(科目名) 生物と農業生産Ⅰ		単位数 開講期	1 単位 1 年次 前期
担当講師	【作物】平澤 正〔東京農工大学名誉教授〕 【野菜】北条 雅章〔千葉大学環境健康フィールド科学センター特任研究員〕		
授業のねらい	農業は、作物や家畜という生物の営みを利用して人間に有用な生産物を得る生命産業である。農業経営者は、工業生産とは異なる農業生産の特質を正しく理解し、植物や動物を科学の視点で観察する目が求められる。このため、本講義では、植物・動物を健全に栽培・飼育し、生産能力を高めるために必要となる基本的・本質的な知識を身に付けることを目的とする。		
授業の概要	生物と農業生産Ⅰでは、作物及び野菜について学ぶ。 【作物】 まず、作物の一般的特徴を説明し、作物（農作物）を分類する。ついで、生活史に沿って作物の基本的な性質を概説し、これに基づいて、水稻、麦類、ダイズの形態・生理・生態的特性を解説する。最後に、これらの作物の現在の栽培技術を紹介し、これからの栽培技術を考える。 【野菜】 野菜の定義、各種作物の中での位置づけ、栄養学的利用法などを概説し、品種の成立や育種方法、発芽・花成・結実・養水分吸収など一般的な生理・生態に関する基礎的理論を解説する。さらに、それらをベースにした栽培法や、環境制御技術および新技術などを判りやすく講義する。		
授業計画	【作物】 第1講 作物の種類と特徴 第2講 作物の一生 第3講 水稻：特性、現在とこれからの栽培技術 第4講 麦類とダイズ：特性、現在とこれからの栽培技術 【野菜】 第1講 野菜とは何か、分類と消費動向 第2講 施設栽培と露地栽培 第3講 ナス科、ウリ科野菜の栽培 第4講 養液栽培などの新しい技術の発展		

履修上の注意 (準備学習等)	個々の知見・情報を細切れに知ることではなく、学んだこと、経験したことを、自らの知的体系として構成し、理解を深められるようにしよう。 【作物】 作物の性質、特徴がどのように栽培技術の中に取り入れられているかを授業でよく理解するようにしてください。以前学んだ植物の基本的な形やしくみを、あらかじめ復習しておくことが授業をよく理解する上で大切です。
教科書	必要に応じてプリント等を配付する。
参考書	【作物】 『作物生産生理学の基礎』 平沢正・大杉立編著（農文協） 『作物』 平沢正他10名（実教出版） 『作物学』 今井勝・平沢正編（文永堂出版） 【野菜】 農学基礎シリーズ 野菜園芸学の基礎 著者 篠原温 編著 出版農山漁村文化協会

(領域) 農業力		(学群) 生物と農業	
(科目名) 生物と農業生産Ⅱ		単位数 開講期	1. 5単位 1年次 後期
担当講師	【畜産】小林 信一〔日本大学生物資源科学部教授〕 【果樹】澤登 早苗〔恵泉女学園大学人間社会学部教授〕 【花き】渡辺 均〔千葉大学環境健康フィールド科学センター准教授〕		
授業のねらい	農業は、作物や家畜という生物の営みを利用して人間に有用な生産物を得る生命産業である。農業経営者は、工業生産とは異なる農業生産の特質を正しく理解し、植物や動物を科学の視点で観察する目が求められる。このため、本講義では、植物・動物を健全に栽培・飼育し、生産能力を高めるために必要となる基本的・本質的な知識を身に付けることを目的とする。		
授業の概要	生物と農業生産Ⅱでは、畜産、果樹及び花きについて学ぶ。 【畜産】 農業経営における家畜など動物の役割を理解することを目的とする。各畜種の特徴とそれぞれの飼養管理法について学ぶ。また、わが国の畜産の特徴と問題点および畜産への新規就農や経営支援組織についても解説する。さらに家畜を取り入れた農業経営について、各自にシミュレーションを行ってもらう。 【果樹】 果樹に関する基本的なことがらを理解することを目的とする。果樹園芸の特徴と果樹の種類と品種、栽培方法について学ぶ。また、果樹における有機栽培の実態・課題・可能性、土づくりの方法などについても解説する。 【花き】 花き園芸に関する基本的なことがらを理解することを目的とする。花き業界全般について解説し、その特徴を理解する。また、花き生産に必要な基本的な生産技術について、それぞれの生産形態ごとに解説する。さらに、まとめとして花き業界の問題点とビジネスチャンスについて解説する。		
授業計画	【畜産】 第1講 農業における家畜の役割 第2講 乳牛と肉牛の飼育管理と牛を取り入れた経営事例 第3講 中小家畜の飼養管理と中小家畜を取り入れた経営事例 第4講 野生鳥獣対策 第5講 畜産における経営支援組織と新規就農 第6講 家畜を取り入れた農業経営のシミュレーション（発表）		

	【果樹】 第1講 果樹園芸とその特徴 第2講 果樹の種類と品種 第3講 育種と繁殖 第4講 有機栽培と土づくり 【花き】 第1講 花き園芸の概略と特徴 第2講 花き生産品目と流通 第3講 花き生産技術 第4講 花き園芸の問題点とビジネスチャンス
履修上の注意 (準備学習等)	個々の知見・情報を細切れに知ることではなく、学んだこと、経験したことを、自らの知的体系として構成し、理解を深められるようにしよう。
教科書	特に指定しない。必要に応じてプリント等を配付する。
参考書	【畜産】 『畜産学入門』 唐澤 豊・大谷 元・菅原邦生編（文永堂出版） 【果樹】 『果樹園芸学の基礎』 伴野 潔・山田 寿・平 智 （農文協）

(領域)	農業力	(学群)	資源・環境と農業
(科目名)	資源・環境と農業生産Ⅰ	単位数 開講期	1. 5単位 1年次 後期
担当講師	陽 捷行 [(公財)農業・環境・健康研究所農業大学校校長、北里大学名誉教授] 荘林幹太郎 [学習院女子大学国際文化交流学部教授] 石郷岡康史 [(研)農業・食品産業技術総合研究機構 農業環境変動センター主任研究員] 根本 久 [保全生物的防除研究事務所代表、 元埼玉県農林総合研究センター水田農業研究所研究所長] 宇根 豊 [農と自然の研究所代表]		
授業のねらい	地球の水・大気・土壌などの環境資源には限りがある。これまでは、地球のもつこれら資源の利子で人類は食料生産を続けてきた。74億の人口を養うために、われわれは、すでに利子を使い果たし、元金に手をつけはじめた。農業生産を持続的に遂行するためには、農業が持つ物質循環機能を活かし、環境と調和した農業を成功させなければ、人類の未来はこころもとない。ここでは、環境資源、エネルギーなどの問題を理解し農業経営を営む必要性を理解させる。		
授業の概要	資源・環境と農業生産Ⅰでは、農業と資源・環境との関係、大気環境、植物防疫、生物多様性等について学ぶ。 1. 総論【陽、荘林】 農業と資源・環境との関係、農業と環境問題などの総論を学ぶ。また、農業と環境政策の関わり、有機農業の推進等について学ぶ。 2. 農業と大気環境【石郷岡】 農業活動は、環境に大きな影響を与える。例えば、過剰な窒素肥料の施用により亜酸化窒素が大気に放出される。その結果、オゾン層は破壊され温暖化が促進される。また、水田の拡大により水田からのメタン発生量が増大し、温暖化に影響を及ぼす。一方、稲作を含む多くの作物がオゾン層破壊や温暖化により影響を受ける。このように、農業と大気環境は密接に関係している。ここでは、農業活動がどのようにしてオゾン層破壊や温暖化に影響を及ぼすかを基本的に理解し、その対策についての知識を獲得する。さらに、温暖化が促進された結果、イネがどのような影響を受け、イネの生産がどのように変動するかを解説する。加えて、大気の大気炭素濃度が今後増加し続けると、イネの生産にどのような影響が出てくるかを現場のデータをもとに解説する。これらのことを理解することによって、農業と大気環境が密接な関係にあることが理解できる。 3. 農業と生物的環境【根本】 この授業では、成熟社会で求められる3つの安全（生産者の安全、生産物の安全、環境への安全）、病害虫による損失とその相対性、農業と生物多様性、人間活動が生み出す病害虫、病害虫が発生するための3要素、病害虫を防ぐ基本的な考え方、環境保全型農業の理念と生態学に基づいた総合的有害生物管理（IPM）等について学ぶ。		

	4. 農業と自然環境（生物多様性）【宇根】 百姓にとって自然とは何かを考えると、村や自分の外からのまなざしと、自分の実感からの内からのまなざしをどうつなぐかが難しい。この講義ではこのための理論の形成方法を提示する。農業は自然を（生きものを）相手とする仕事・くらしであるので、身近な自然環境から影響を受け、同時に影響を及ぼすからである。それを仕事の中で実感し自分なりの「自然観」に育てていかなければならない。農業の本質とは、自然に働きかけ、自然に包まれ、この関係が持続することである。この講義では、伝統的な日本人の天地（自然）観を振り返り、農業観がどのように変容してきたかを学ぶ。特に田畑や作物や生きものとの緊張関係をどのように引き受けて、農業生産を持続させていくかという百姓の責任を掘り下げる。
授業計画	1. 総論 第1講 農業が環境に及ぼす影響と、環境が農業に及ぼす影響 [陽] 第2講 農業が持つ環境保全機能 [陽] 第3講 農業と環境政策（1） [荘林] 第4講 農業と環境政策（2） [荘林] 2. 農業と大気環境 第5講 地球温暖化が作物生産に及ぼす影響 [石郷岡] 第6講 高二酸化炭素濃度がイネの生育に及ぼす影響 [石郷岡] 3. 農業と生物的環境 第7講 環境に優しい病虫害防除の基礎 [根本] 第8講 海外での農薬規制とIPMの歴史 [根本] 第9講 施設栽培での天敵を利用した害虫防除の先進技術 [根本] 第10講 天敵を利用した害虫防除の実践 [根本] 4. 農業と自然環境（生物多様性） 第11講 日本人の自然観とはどのようなものか [宇根] 第12講 百姓の自然のとらえ方 [宇根] 第13講 農業技術と百姓仕事のちがひ [宇根] 第14講 環境保全型農業とは何か [宇根] 第15講 自然を支える農業政策は可能か [宇根] 第16講 自然を武器にする農本主義の時代へ [宇根]
履修上の注意 (準備学習等)	【1. 総論、2. 農業と大気環境】 高校程度の国語および理科を理解していることを前提に授業する。地球温暖化が何たるかを理解して授業に臨むこと。 【3. 農業と生物的環境】 高等学校の生物学を理解していることを前提に授業を行う。疑問な点については授業中に質問するなどしてよく理解するようにすること。 【4. 農業と自然環境（生物多様性）】 農業と自然の関係を百姓の仕事の中で、一度でも考えたことがあることを前提に講義を行う。農業と自然環境の関係について自分なりの自然観を鍛え、表現するためのチャンスだと考えて授業に臨むこと。

教科書	【3. 農業と生物的環境】 『天敵利用の基礎と実際』根本 久・和田哲夫 編（農山漁村文化協会） 『野菜を病気と害虫から守る本』根本 久（NHK出版） 【4. 農業と自然環境（生物多様性）】 『田んぼのめぐみ100』（農と自然の研究所） 『ごはんも生きものも田んぼのめぐみ』（農と自然の研究所） 必要に応じてプリント等を配付する。
参考書	【1. 総論、2. 農業と大気環境】 『土壌圏と大気圏』陽捷行編著（朝倉書店） 『環境保全と農林業』陽捷行（朝倉書店） 『この国の環境』陽捷行著（アサヒビール・清水弘文堂書房） 『地球の悲鳴』陽捷行著（アサヒビール・清水弘文堂書房） 『18 cmの奇跡』陽捷行著（三五館） 『世界の農業環境政策』荘林幹太郎他著（農林統計協会） 【3. 農業と生物的環境】 『天敵利用と害虫管理』根本久（農文協） 『天敵利用で農薬半減』根本久編著（農文協） 『野菜・果樹・草花・庭木の病気と害虫』根本 久（主婦の友社） 『イラスト 基本からわかる病虫害の予防と対策』根本 久 監修（家の光協会） 【4. 農業と自然環境（生物多様性）】 『農は過去と未来をつなぐ』宇根豊（岩波ジュニア新書） 『百姓学宣言』宇根豊（農文協） 『風景は百姓仕事がつくる』宇根豊（築地書館） 『田んぼの生き物指標』農と自然の研究所編（農と自然の研究所） 『農本主義が未来を耕す』宇根豊（現代書館） 『農本主義へのいざない』宇根豊（創森社）

(領域) 農業力	(学群) 資源・環境と農業
(科目名) 資源・環境と農業生産Ⅱ	単位数 開講期 2単位 2年次 前期・後期
担当講師	陽 捷行 [(公財)農業・環境・健康研究所農業大学校校長、北里大学名誉教授] 小川吉雄 [鯉淵学園農業栄養専門学校教授] 橋本力男 [堆肥・育土研究所代表] 薬師堂謙一 [(研)農業・食品産業技術総合研究機構 元バイオマス研究統括コーディネータ] 小林 久 [茨城大学農学部教授] 菅野芳秀 [農業者(山形県長井市)、レインボープラン推進協議会相談役] 折戸えとな [明海大学・早稲田大学非常勤講師] 相原成行 [有機農業実践者(神奈川県藤沢市)、相原農場代表] 萩原紀行 [有機農業実践者(長野県佐久穂町)、のらくら農場代表] 金子美登 [特定非営利活動法人全国有機農業推進協議会理事長、霜里農場代表]
授業のねらい	地球の水・大気・土壌などの環境資源には限りがある。これまでは、地球のもつこれら資源の利子で人類は食料生産を続けてきた。74億の人口を養うために、われわれは、すでに利子を使い果たし、元金に手をつけはじめた。農業生産を持続的に遂行するためには、農業が持つ物質循環機能を活かし、環境と調和した農業を成功させなければ、人類の未来はこころもとない。ここでは、環境資源、エネルギーなどの問題を理解し農業経営を営む必要性を理解させる。
授業の概要	資源・環境と農業生産Ⅱでは、土壌環境、堆肥と土づくり、農業と資源・エネルギー、有機農業等について学ぶ。 5. 農業と土壌環境【陽、小川】 土壌は作物を生産する機能と環境を保全する機能の二つを持ち合わせている。環境保全に関わるものとしては、有機物分解などのバイオリクター機能、水涵養機能、洪水防止機能、微生物活性やイオン交換による水質浄化機能などがあげられる。これらの機能は農業の生産活動を通して土壌が適正に管理されてはじめて持続的に維持される。ここでは、これらの機能維持と環境保全型農業における土壌管理技術について学ぶ。 6. 堆肥と土づくり【橋本】 この授業では、地域にある多様な有機物と無機物を堆肥化すること、肥料自給を可能にする発酵技術の原理や堆肥づくりについて学ぶ。そのため有機物の分類方法、各堆肥の混合比率、仕込み、発酵管理、完熟の判定を学ぶ。次に、堆肥を利用して作物の病虫害が少なく、美味しい食べものが生産できる「健康な土づくり」について説明する。つまり各堆肥の使い方、栽培方法を学ぶ。 7. 農業と資源・エネルギー【薬師堂、小林、菅野】 地域で生産・発生する各種のバイオマスを用いて、農業生産資材やエネルギーを作り出し利用するシステムについて学ぶ。また、農業・農村における自然エネルギーの生産・利活用や、循環型地域社会づくりの実践について学ぶ。

	8. 環境と調和した持続的な農業生産【折戸、相原、萩原、金子】 環境と調和した持続的な農業生産について、有機農業を実践している農業者等からさまざまな取り組みの実践例を学ぶ。
授業計画	<前期> 5. 農業と土壌環境 第1講 土壌学の基礎 [陽] 第2講 土壌のもつ環境保全機能 [陽] 第3講 環境にやさしい農業と施肥技術 [小川] 第4講 土壌診断と土づくり [小川] 6. 堆肥と土づくり 第5講 有機物の利用と分類・家畜ふん尿・刈り草・落ち葉・生ごみの堆肥化 [橋本] 第6講 堆肥化技術・堆肥づくり（発酵原理、仕込み、発酵管理） [橋本] 第7講 堆肥の使い方 [橋本] 第8講 健康な土づくり・有機栽培・オーガニックフラワー [橋本] 7. 農業と資源・エネルギー 第9講 バイオマス利活用と農業（1） [薬師堂] 第10講 バイオマス利活用と農業（2） [薬師堂] <後期> 第11講 自然エネルギーと農業・農村（1） [小林] 第12講 自然エネルギーと農業・農村（2） [小林] 第13講 循環型地域社会づくりの実践（1） [菅野] 第14講 循環型地域社会づくりの実践（2） [菅野] 8. 環境と調和した持続的な農業生産 第15講 世界の中の有機農業 [折戸] 第16講 有機農業の実践（都市農業） [相原] 第17講 有機農業の実践（山間地） [萩原] 第18講 エネルギーと食、これからの有機農業（1） [金子] 第19講 エネルギーと食、これからの有機農業（2） [金子]
履修上の注意 (準備学習等)	【6. 堆肥と土づくり】 教科書の第1章・第6章・あとがきを事前に読むこと。
教科書	【6. 堆肥と土づくり】 『畑でおいしい水をつくる』橋本力男（北星社） 【8. 環境と調和した持続的な農業生産】 『霜里農場 金子さんと地域づくり』金子美登/NPO生活工房つばさ・游 編著

参考書

【5. 農業と土壌環境】

『環境保全と農林業』陽捷行（朝倉書店）
 『18cmの奇跡』陽捷行（三五館）
 『環境・資源・健康を考えた土と施肥の新知識』
 渡辺和彦・後藤逸男・小川吉雄・六本木和夫（農文協）

【6. 堆肥と土づくり】

『堆肥づくり・土づくり・有機育苗』橋本力男（NPO有機農業技術会議）
 『堆肥のつくり方・使い方』藤原俊六郎（農文協）
 『農家の技術・早わかり事典』（農文協）

【7. 農業と資源・エネルギー】

『生ゴミはよみがえる』菅野芳秀（講談社）
 『コミュニティ・エネルギー-小水力発電、森林バイオマスを中心に-』室田武・倉阪秀史・
 小林久・島谷幸宏・山下輝和・藤本穰彦・三浦秀一・諸富徹（2013、農文協）
 『玉子と土といのちと』菅野芳秀（創森社）
 『生ごみはよみがえる』菅野芳秀（講談社）
 『シビック・アグリカルチャー』トーマス ライソン（農林統計出版）

【8. 環境と調和した持続的な農業生産】

『絵とき金子さんの有機家庭菜園』金子美登（家の光協会、2012）
 『イラストでわかる有機自給菜園』金子美登（家の光協会）
 『CSA 地域支援型農業の可能性ーアメリカ版地産地消の成果』
 エリザベス・ヘンダーソン（家の光協会、2008）
 『「創造的である」ということ〈上〉農の営みから』内山節（農文協、2006）
 『「創造的である」ということ〈下〉地域の作法から』内山節（農文協、2006）
 『無農薬・有機のイネづくり』稲葉光國（農文協）
 『宴のあとの経済学』E.F. シューマッハー（ちくま学芸文庫、2011）
 『小さくて強い農業をつくる』久松達央（晶文社、2014）
 『食と農の社会学 生命と地域の視点から』榊渥俊子・谷口吉光・立川雅司編著
 （ミネルヴァ書房、2014）
 『肥満と飢餓 世界フードシステムの不幸のシステム』ラジ・パテル（著）
 佐久間智子（訳）（作品社、2010）
 『家族農業が世界の未来を拓く 食料保障のための小規模農業への投資』
 国連世界食料保障委員会専門家ハイレベル・パネル（著）、家族農業研究会、
 （株）農林中金総合研究所（共訳）（農文協、2014）
 『オーガニックラベルの裏側: 21世紀食品産業の真実』クレメンス・G・アルヴァイ（著）、
 長谷川 圭（翻訳）（2014 春秋社）

(領域) 農業力		(学群) 食料・農業の政策と法律	
(科目名) 日本の食料・農業政策		単位数 開講期	1. 5単位 1年次 前期・後期
担当講師	生源寺眞一〔福島大学農学系教育研究組織設置準備室教授〕 安藤 光義〔東京大学大学院農学生命科学研究科教授〕 江川 章〔中央大学経済学部准教授〕 室屋 有宏〔桃山学院大学経営学部教授〕 内田多喜生〔(株)農林中金総合研究所調査第一部主席研究員〕 長谷川晃生〔(株)農林中金総合研究所食農リサーチ室主任研究員〕 小針 美和〔(株)農林中金総合研究所調査第一部主任研究員〕		
授業のねらい	本講義では、現代日本の食料政策と農業政策について、その背景にある日本社会の構造変化や経済のグローバル化の流れを踏まえながら、基本的・包括的な知識を身につける。とくに農業経営と直接に関係する政策領域については、経営者としての適切な対応方法を含めて詳しく解説する。さらに、政策のあり方に関して、冷静な判断や建設的な提言にもつながるように、的確な鑑識眼を養うこともねらいとする。		
授業の概要	初回の講義で日本の食料・農業・農村政策の概要を把握し、続いて量と質の両面から国民の食の安全を確保する政策について論じる。そのうえで農業経営の育成に関わる担い手政策や農地制度の推移と現状、農業経営の成長を支える重要な要素である金融政策や技術政策を学ぶ。さらに地域とともに生きる農業経営という問題意識に立って、農村政策を学習する。		
授業計画	【前期】 第1講 食料・農業・農村政策の全体像〔生源寺〕 第2講 食料自給率と米政策〔生源寺〕 第3講 食の安全・安心と食料安全保障〔生源寺〕 第4講 担い手政策①〔小針〕 第5講 担い手政策②〔小針〕 第6講 農業への新規参入①〔江川〕 第7講 農業への新規参入②〔江川〕 第8講 農業の六次産業化〔室屋〕 【後期】 第9講 農地制度①〔内田〕 第10講 農地制度②〔内田〕 第11講 農業金融①〔長谷川〕 第12講 農業金融②〔長谷川〕 第13講 農業技術の開発と普及〔内田〕 第14講 農村社会と農業集落〔安藤〕 第15講 農村資源の保全と活用〔安藤〕		
履修上の注意 (準備学習等)	特になし		
教科書	特になし		
参考書	『日本農業の真実』生源寺眞一（筑摩書房） 『農業制度資金の解説』公益財団法人農林水産長期金融協会 『農業と農政の視野・完』生源寺眞一（農林統計出版）		

(領域) 農業力		(学群) 食料・農業の政策と法律	
(科目名) 世界の食料・農業政策		単位数 開講期	1 単位 2 年次 前期
担当講師	生源寺眞一〔福島大学農学系教育研究組織設置準備室教授〕 三石 誠司〔宮城大学食産業学部教授〕 阮蔚 (ルアン・ウェイ)〔(株)農林中金総合研究所基礎研究部主席研究員〕 首藤 久人〔筑波大学生命環境系准教授〕 平澤 明彦〔(株)農林中金総合研究所基礎研究部主席研究員〕 関根久子〔農研機構中央農業研究センター農業経営研究領域 上級研究員〕 石井 圭一〔東北大学大学院農学研究科准教授〕 和泉 真理〔(一社) J C 総研客員研究員〕		
授業のねらい	国によって食料政策や農業政策のあり方は多様であるが、多くの先進国には農業保護という共通項があり、途上国にあつては農家が概して過酷な政策のもとにおかれる傾向がある。本講義では、主要な先進国の食料・農業政策の骨格を学ぶとともに、成長著しいアジアの国々の政策の動向を把握する。各国の政策にはその国の食料と農業の実態も反映されている。政策を手掛かりに海外の食料・農業事情を理解する点も本講義のねらいである。		
授業の概要	最初の 2 回の講義で、先進国と途上国の政策と世界の食料貿易の構図を俯瞰する。そのうえで国別・地域別に具体的な政策について学ぶ。先進国については、アメリカと EU の動向を学ぶとともに、イギリス・フランス・ドイツの政策の特色を理解する。さらに、著しい成長を遂げつつあり、日本の農産物の販路としても重要性を増しているアジア（中国など）について、近年の食料・農業政策の動向を把握する。		
授業計画	第 1 講 世界の食料・農業政策 [生源寺] 第 2 講 国際的な食料貿易の構図 [三石] 第 3 講 アメリカ [三石] 第 4 講 中国 [阮] 第 5 講 アジア [首藤] 第 6 講 市民の取り組み [調整中] 第 7 講 EU 全体 [平澤] 第 8 講 ドイツ [関根] 第 9 講 フランス [石井] 第 10 講 イギリス [和泉]		
履修上の注意 (準備学習等)	参考書に掲げた『農業がわかると、社会のしくみが見えてくる』の第 2 章を読んでおくことが望ましい。		
教科書	特になし		

参考書	『農業がわかると、社会のしくみが見えてくる』生源寺眞一（家の光協会） 農業協同組合新聞【電子版】三石先生連載コラム 「グローバルとローカル：世界は今」http://www.jacom.or.jp/column/cat602/ 「グローバル展開で食の安全保障を図る中国」『農林金融』2015年2月号 「中国人が称賛する日本の農協」『Voice』2015年1月号 159p 「直接支払いと農業保護：日本にとっての留意点」『Agrio』(56), 15-16p, 2015年4月14日. 「『EUの農協』を読み解く－日本の農協改革への示唆は－」『Agrio』(63), 15-16p, 2015年6月9日. 「ロシア禁輸等によるEU農産物市況の低迷と対策－酪農、青果、豚肉－」『農 中総研 調査と情報』, 2-3p, 2016年7月.
-----	---

(領域) 農業力		(学群) 食料・農業の政策と法律	
(科目名) 食料・農業の法律と制度		単位数 開講期	1 単位 2 年次 後期
担当講師	高木 賢 [弁護士、公立大学法人高崎経済大学理事長、元食糧庁長官] 出田 安利 [農林水産政策研究所次長] 松原 明紀 [水産庁漁政部漁政課長] 武田 泰明 [特定非営利活動法人アジアGAP総合研究所専務理事]		
授業のねらい	この授業では、食料・農業に関する各分野の政策の枠組みを形成している食料・農業関係諸法律について、食料・農業に関する実態認識及びあるべき方向との関連の下に、体系的に習得することを目的とする。併せて、食料・農業の法律に隣接する法領域についても、習得することを目的とする。		
授業の概要	この授業では、相当数存在する食料・農業関係の法律を大きく10の分野に分類し、それぞれの分野ごとにまとめて講義することにより、それぞれの分野における法律の体系的な理解ができるようにする。その際、併せて隣接する法領域についても講義し、幅広く、日本の行政関係法が理解できるようにする。 農業経営の観点から、経営上頭に入れておかなければならない必須の法律知識を、その背景事情とも関連させつつ、漏れなく講義する。食料・農業に関する基本的法律はもとより、自己の生産する食品の安全性確保や表示に関する法律、販売を規制する法律を第一の重点に、また、農業経営自体にかかわるものとして、農業経営の安定に資するための法律、農地関係法律、農業団体関係法律、知的財産権関係法律を第二の重点に、さらに今後配慮していくべき環境関係分野を第三の重点にして、自然環境維持増進・環境保全関係法律、森林・林業関係法律について講義する。 分量が多いので、演習方式を採用するゆとりはないものと見込まれる。各授業においては、担当講師の創意工夫の下に、わかりやすい教材を作成し、それに基づいて講義を進める。		
授業計画	第1講 食料・農業・農村基本法その他関連基本法 [高木] 第2講 食品安全基本法 [松原] 第3講 食品表示関係法、知的財産関係法 [松原] 第4講 自然環境維持増進・環境保全関係法、森林・林業関係法 [松原] 第5講 食品の流通販売関係法、6次産業化関係法、農協法等団体関係法 [出田] 第6講 経営安定関係法 [出田] 第7講 農地法等農地・土地関係法 [高木] 第8講 GAP制度と認証制度（GAPの機能・役割と認証制度） [武田] 第9講 実現場におけるGAP①（GAPの事例紹介① 現地検討） [武田] 第10講 実現場におけるGAP②（GAPの事例紹介② 現地検討） [武田]		
履修上の注意 (準備学習等)	食料・農業の実態を理解していることを前提に授業を行う。		
教科書	特に指定しない。必要に応じてプリント等を配付する。		
参考書	『農林水産六法』（学陽書房）		

社会力領域シラバス

(領域) 社会力		(学群) 社会力入門	
(科目名) フードシステム論		単位数 開講期	1 単位 1 年次 前期
担当講師	中嶋 康博 [東京大学大学院農学生命科学研究科教授] 中嶋 晋作 [明治大学農学部専任講師]		
授業のねらい	現代の食と農は大きな曲がり角に直面している。これからの行く末を見通すために、食と農、そしてそれらを支える社会的枠組みの現状と課題をフードシステムの概念を通して学ぶ。食生活の変化、食をめぐる産業、社会的に必要とされる制度の実態と背景を社会科学的視点、特に経済学的視点に基づいて、理解して考察できる思考方法と専門知識を身に付けることを目的とする。		
授業の概要	まず、授業全体を通して考えるための基礎であるフードシステムの枠組みと機能を紹介する。その上で、わが国の食料消費が戦後どのように変化したかを確認し、近年の特徴を述べる。次に、それらの食を支える農業、食品製造業、流通業、小売業の実態を産業組織という観点から説明する。そのうち特に農産物流通の機能と課題を明らかにする。以上のことを踏まえながら、農業・食料政策の新しい取り組みである農業の6次産業化の動きをフードシステムの観点から説明し課題を指摘する。さらに近年、消費者の最大の関心事項である、食の安全問題を取り上げて、その問題点と対策について考察する。また関連して食の信頼問題にも言及し、その解決策として注目されているフードコミュニケーションの意義を明らかにする。最後に現代の消費者の意識と行動を踏まえながら新しいフードシステムをどのように設計すべきかについて学び考える。		
授業計画	第1講 フードシステムとは何か [中嶋康博] 第2講 わが国の食料消費 [中嶋康博] 第3講 農業とフードシステムの関連構造 [中嶋晋作] 第4講 食品産業の産業組織 [中嶋晋作] 第5講 農産物流通 [中嶋晋作] 第6講 農業の6次産業化 [中嶋晋作] 第7講 食の安全と信頼 [中嶋康博] 第8講 新しいフードシステム [中嶋康博]		
履修上の注意 (準備学習等)	受講するにあたって特別な準備は必要ない。		
教科書	特に指定しない。必要に応じてプリント等を配付する。		
参考書	『フードシステムの経済学』 時子山ひろみ・荏開津典生・中嶋康博 (医歯薬出版) 『食の安全と安心の経済学』 中嶋康博 (コープ出版) 『日本農業の真実』 生源寺眞一 (筑摩書房)		

(領域) 社会力		(学群) 消費者・食生活・食文化	
(科目名) 食生活と食文化		単位数 開講期	1 単位 1 年次 後期
担当講師	武見 ゆかり〔女子栄養大学栄養学部教授〕 宇野 薫 〔女子栄養大学大学院 栄養学研究科〕		
授業のねらい	地域で生活する人々の多様な「食の営み」を、環境要因も含め構造的に整理し、生活の質 (Quality of Life) の向上につながるような望ましい食生活やライフスタイルについて理解するとともに、国際的にも評価が高い日本の伝統的な食事パターンや食文化についての理解を深めることを目的とする。		
授業の概要	この授業では、人間にとって食とは何か、人間の食は環境とどのように関わりを持って営まれてきたかなどについて、食生態学の視点および枠組みにそって、食の多様性、食行動の特徴、食物の階層構造、食歴、環境との関わり等について学ぶ。 また、各地に伝えられてきた伝統的な食生活の実態を学び、多様で豊かな地域文化の重要性を理解する。		
授業計画	第1講 人間にとって望ましい食とは：人間が食にのぞむもの、食行動の多様性 第2講 社会にとって望ましい食とは：社会全体の変化や将来像をふまえ 第3講 食物の階層構造：栄養素－食品－料理－食事のつながり 第4講 何をどれだけ食べたらよいか：自分の食事の自己点検 第5講 食育と自給率向上 第6講 健康情報の読み解き方 第7講 地域の食文化・郷土料理 第8講 人間の食と食環境、及びその循環		
履修上の注意 (準備学習等)	出身地域の年中行事や行事食、伝統食、郷土料理を調べ、理解した上で授業に臨むこと。		
教科書	特に指定しない。必要に応じてプリント等を配付する。		
参考書	『食生活論』足立己幸編著（医歯薬出版）		

(領域) 社会力		(学群) 消費者・食生活・食文化	
(科目名) 食品産業と農業		単位数 開講期	0. 5 単位 2 年次 前期
担当講師	清水 みゆき 〔日本大学生物資源科学部教授〕		
授業のねらい	食品製造業（食品工業）、食品流通業、外食産業から成る食品産業は、日本中のどこにも立地している。食品産業は原材料や商材として農産物を取り扱う産業であるから、本来的に農業と切っても切れない間柄である。グローバル化によって外国農産物の利用が増える一方で、国産農産物への期待も大きい。この授業では、最終消費者と食品産業、食品産業と農業との関係について、その歴史と現状を知り、どうすれば食品産業と日本農業との関係をより良いものにできるかを考える。		
授業の概要	最初の2回は、食品産業と農業の関係を考えるベースとして、産業構造と日本経済における地位の両面から、食品産業とは何かを学ぶ。日常生活と不可分に結びついている食品産業は、現代的な企業の登場するはるか以前から、農業の地域性に対応しつつ地域ごとの個性を持って発展し、日本経済において重要な地位を占めてきた。例えば、外食産業という言葉が使われるようになったのは1970年以降だが、外食という業態はすし店、そば店のように古くから日本人の暮らしの重要な一部になっていた。第3～6講では、食品産業を構成する業種ごとにその特徴を確認するとともに、農業との関わりを明らかにする。2009年の農地法改正を機に増加してきた食品企業の農業参入についても、その狙いと参入後の様子を知り、農業改革の手がかりとする。最後に6次産業化や食農連携の講義を踏まえ、学生間の討論を通じて農業と食品産業の良い関係づくりの道を探る。		
授業計画	第1講 食品産業とは①食生活の変遷と食品産業との関わり 第2講 食品産業とは②食品産業の構造と日本経済における食品産業の地位 第3講 食品製造業と農業 第4講 食品流通業と農業 第5講 外食産業と農業 第6講 食品産業と農業との関係構築の問題点と今後の展望		
履修上の注意 (準備学習等)	新聞を読むことは必須です。とくに経済面を読む習慣をつけること。		
教科書	指定しない。必要に応じてプリント等を配付する。		
参考書	『食と農の戦後史』 岸 康彦（日本経済新聞出版社） 『食料経済 第5版』 高橋正郎ほか（オーム社）		

(領域)	社会力	(学群)	消費者・食生活・食文化
(科目名)	消費者運動と食・農のパートナーシップ	単位数 開講期	1 単位 2 年次 前期
担当講師	宮崎 達郎〔公益財団法人 生協総合研究所 研究員〕		
授業のねらい	生産者と消費者は、市場における供給側と需要側という立場であるが、ソーシャルメディアの発達などにより、その関係はより近く、より対等になっている。消費者とパートナーシップを形成し価値共創していくことが、生産者の経営や社会的貢献にとって重要になってきている。 上記を踏まえ、本講義の目的は大きく以下の2点である。 ・消費者運動の歴史や、食の安全や健康に対する消費者意識について学習し、消費者が求めるニーズについての理解を深める ・消費者とのコミュニケーションの方法について学習し、消費者と価値共創できるパートナーシップを構築する上での課題について考察する		
授業の概要	この授業では、消費者運動と農業の接点をめぐって、具体的な事例を挙げてケーススタディとディスカッションを行う。授業全体を通じて、今の時代に、農業経営者が消費者の信頼を獲得し、消費者とのパートナーシップを構築していくために必要なことは何であるかを一緒に考えたい。		
授業計画	第1～2講 総論・食と農と消費者運動の戦後史を振り返る 第3～4講 消費者が食や農にもとめるものとは何か 第5～6講 現代における生産者と消費者のコミュニケーションの事例と課題 第7～8講 三方良しの理念と課題—生協産直を事例に		
履修上の注意 (準備学習等)	初回に、岸康彦先生の『食と農の戦後史』を前提とした議論をするので、一読したうえで参加することが望ましい。 また、自分が生産者となった場合を想像して、①消費者にどのような物・サービスを提供していきたいと考えているのか、②その提供した物・サービスに対して消費者はどのような反応をするか、ということ想像をよいので考えておくこと。生産者の提供したいものと消費者の求めるものにズレがないか、ということを確認することも授業のねらいの1つである。		
教科書	特に定めない		
参考書	①『食と農の戦後史』岸 康彦（日本経済新聞社、1996年） ②『R3コミュニケーション—消費者との「協働」による新しいコミュニケーションの可能性』恩蔵 直人・ADK R3プロジェクト（宣伝会議、2011年） その他、講義に必要な資料は適宜配布する。		

(領域) 社会力	(学群) 農村地域の活性化
(科目名) 農山村の再生戦略	単位数 開講期 1. 5単位 1年次 前期・後期
担当講師	小田切 徳美〔明治大学農学部教授〕 荘林 幹太郎〔学習院女子大学国際文化交流学部教授〕 筒井 一伸〔鳥取大学地域学部准教授〕 橋口 卓也〔明治大学農学部准教授〕 図司 直也〔法政大学現代福祉学部教授〕 神代 英昭〔宇都宮大学農学部准教授〕 山浦 陽一〔大分大学経済学部准教授〕
授業のねらい	農山村をめぐる課題は、農業や産業・経済のみでなく多面的である。「生活」「資源」「コミュニティ」含め、その総合的な状況の中で、地域の再生をいかに進めていくかを考えなくてはならない。政策のあり方や農業経営者として（あるいは集落の一員として）の振る舞い方を含め、自らの地域の内発的発展を実現する理論と実践（基準）を身に付けることを目的とする。
授業の概要	この授業では、第1に、農山村の再生戦略にかかわり、マクロ的状況と従来までの政策の概況を講述する。第2に、多面的な農山村の再生の要素として、「農林業」「生活」「資源・コミュニティ」の各論について論じる。そして、第3に、それらを総合化して、ヨーロッパの農山村再生の動きから学びながら、我が国における農山村の内発的発展の実践的方向性について学ぶ。
授業計画	<前期> 第1講 農山村・再生戦略ーイントロダクション（1） [小田切] 第2講 農山村・再生戦略ーイントロダクション（2） [小田切] 第3講 農山村の位置づけと役割（1） [橋口] 第4講 農山村の位置づけと役割（2） [橋口] 第5講 農山村をめぐる政策ー国と地方（1）ー [筒井] 第6講 農山村をめぐる政策ー国と地方（2）ー [筒井] 第7講 農山村の農業とその再生（1） [神代] 第8講 農山村の農業とその再生（2） [神代] <後期> 第9講 農山村の生活問題とその再生（1） [山浦] 第10講 農山村の生活問題とその再生（2） [山浦] 第11講 農山村の資源・コミュニティとその再生（1） [図司] 第12講 農山村の資源・コミュニティとその再生（2） [図司] 第13講 農山村再生とEUの戦略・政策ーそのインプリケーション（1） [荘林] 第14講 農山村再生とEUの戦略・政策ーそのインプリケーション（2） [荘林] 第15講 農山村再生の展望ー総括（1） [小田切] 第16講 農山村再生の展望ー総括（2） [小田切]

履修上の注意 (準備学習等)	高校の「現代社会」または「政治・経済」の内容を理解していることを前提に授業を行う。自らがかわる（予定の）地域の状況を良く知り、その地域の発展のためにどうしたら良いのかということを常に考えながら授業に参加することを望みたい。
教科書	『農山村再生に挑む』 小田切徳美編（岩波書店） ※本講義用に作成されたテキストである。
参考書	『農山村は消滅しない』 小田切徳美著（岩波書店） 『農山村再生の実践』 小田切徳美編著（農山漁村文化協会） 『世界の農業環境政策』 荘林幹太郎他著（農林統計協会） 『地域政策入門』 藤井正他編著（ミネルヴァ書房）

(領域) 社会力	(学群) 農村地域の活性化
(科目名) 協同組合論	単位数 開講期 1 単位 1 年次 後期
担当講師	阿高 あや [J C 総研 副主任研究員] 石田 正昭 [龍谷大学農学部教授] 小山 良太 [福島大学経済経営学類教授] 松岡 公明 [農林漁業団体職員共済組合 (農林年金) 理事長]
授業のねらい	協同組合は、食料、農業、農村を取り巻く環境の中で、歴史的に大きな役割を果たしてきた。しかしながら、協同組合に対する社会の理解は必ずしも高いとはいえない。そこで本講義では、協同組合について、①「協同組合とは何か?」、②「協同組合の目的」、③「協同組合の課題」を学び、受講者自身が協同組合とどのように接していくか、主体的に考える力を身に付けることを目的とする。
授業の概要	この授業では、協同組合を運動 (association) と事業 (enterprise) の矛盾的統合体として捉え、協同組合の基本原理を踏まえ、今日の協同組合の実態と課題を学ぶ。第1に、協同組合は歴史的な存在形態であるから、成立から今日までを歴史的に整理する。第2に今日の農と食にかかる協同組合として、生活協同組合 (消費者購買生協) と農業協同組合 (総合農協=JA) を対象として、その運動と事業の展開と仕組みを学ぶ。第3に、地域でみられる「新しい協同」の動きから、協同組合に求められる社会での役割を検討する。この授業では、協同組合論の専門的研究者をゲストスピーカーとして招へいし、具体的な講義を行う。
授業計画	第1講 協同組合とは? ―基本原理と基礎理論― [阿高] 第2講 日本の協同組合の展開① ―日本型生協論― [阿高] 第3講 日本の協同組合の展開② ―産業組合から総合農協へ― [石田、阿高] 第4講 JAの組織と運動 [石田、阿高] 第5講 JAの事業① ―JAの総合事業― [小山、阿高] 第6講 JAの事業② ―JAの経済事業― [小山、阿高] 第7講 JAの事業③ ―JAの営農経済事業― [松岡、阿高] 第8講 日本農業とJAの未来 [松岡、阿高] 第9講 今日の協同組合の課題 [阿高] 第10講 協同組合の時代 ―新しい協同― [阿高]
履修上の注意 (準備学習等)	受講者自身の体験や地域の協同組合の事業等に関心を抱き、主体的に具体的な情報を収集して授業に臨むことを期待したい。また、自身の農業経営の中で、地域の協同組合と以下に関わっていくのか、主体的な考えを持って授業に臨むこと。
教科書	『JAの歴史と私たちの役割』石田正昭 (家の光協会) その他必要に応じてプリント等を配付する。 資料として「JAファクトブック2016」を使用する。
参考書	『協同組合を学ぶ』中川雄一郎・杉本貴志編 (日本経済評論社) 『農協は地域に何ができるか』石田正昭 (農山漁村文化協会) 『1時間でよくわかる楽しいJA講座』北川太一 (家の光協会) 『協同組合の10年に向けた計画 (ブループリント) 』(国際協同組合同盟)

(領域) 社会力		(学群) 農村地域の活性化	
(科目名) 集落営農とJA出資型農業法人		単位数 開講期	1 単位 2 年次 前期
担当講師	小林 元 [広島大学 助教] ほか ※テーマに合わせて実務家を招聘する		
授業のねらい	我が国の農業生産の歴史的発展をひもとくと、特に水田農業では集落などを単位とした農業生産者の集団的対応の歴史がみられる。技術体系が発展した今日でも、集落を単位とした営農、すなわち集落営農が展開し、かつ政策対象となっている。この授業では、こうした集落営農の取り組みの特徴とその意義を理解することを目的とする。		
授業の概要	集落営農を①「むら」（地域と地域資源）、②「農法」（技術の発展）から捉え、歴史的発展と今日的な実態から集落営農の特徴とその意義を理解することを目的とする。集落営農は地域の実態に合わせて多様な発展がみられることから、地帯構成区分に注目して、さまざまな事例とそのリーダーたちの声を実際に聴くことを重視する。単に集落営農を農業生産の組織化に矮小化することなく、地域づくりの視点から読み解くことで、受講者自身が将来地域のリーダーとして活躍することを期待し、その一助となることを目的とする。講義はケーススタディによるグループワークを中心とする。		
授業計画	第1講 集落営農の歴史的発展① 「むら」と「農法」 第2講 集落営農の歴史的発展② 社会の発展と結合様式の変化 第3講 集落営農の今日の特徴① 近畿・北陸型 第4講 集落営農の今日の特徴② 中国中山間型 第5講 2階建て集落営農の論理 むらの論理と経営 第6講 3階建て集落営農の展開 広域組織化と販売戦略 第7講 JA出資法人と地域農業 セーフティネットとしてのJA出資法人 第8講 JA出資法人の役割と経営① 担い手・新規就農育成の役割 第9講 JA出資法人の役割と経営② JA出資法人の多様な展開 第10講 集落営農の発展方向 地域づくりと産地づくり		
履修上の注意 (準備学習等)	1 年次に開講する「農山村の再生戦略」と「協同組合論」を理解していることを前提に授業を行う。また、自身の農業経営を想定し、就農を考えている地域の実態や、地域農業の中での自身の農業経営の関わり方について、事前に検討したうえで授業に臨むこと。		
教科書	特に指定しない。必要に応じてプリント等を配付する。		
参考書	『進化する集落営農』 楠本雅弘（農山漁村文化協会）		

(領域) 社会力		(学群) 農村地域の活性化	
(科目名) 農村社会と女性		単位数 開講期	1 単位 2 年次 後期
担当講師	安倍 澄子 [前 日本女子大学 客員教授] 原 珠里 [東京農業大学 教授]		
授業のねらい	この授業では、農業経営をとりまく変化に適応し、また、その変革に向けて農山村女性が取り組む活動状況や問題・課題を理解するとともに、この女性活動が地域活性化に連動するための取り組み方や活用すべき諸制度を学び、地域社会の新たな動きを創り出す資質・能力を身に付けることを目的とする。		
授業の概要	今日、女性農業者は共同経営者として経営参画し、また異業種部門を取り入れた加工・直売による起業活動でエンパワーメントし、地域社会への参画も進めながら地域活性化に大きく貢献している。これらの取り組みを進めていくにあたって、経営と生活との両輪のバランスを保つこと、ワーク・ライフ・バランス、部門間の役割分担などの協力体制確立が必須となる。 そこで、女性のライフサイクルの特性を知り、生活経営論を基礎として学ぶ。この農業・生活経営の基礎知識をふまえ、地域活性化に向けた女性活動の現状把握、地域で女性が果たす役割変化にともなうネットワーク形成、地域社会の資源活用（ソーシャルキャピタル）に関する知識、関連する行政の支援策など諸制度に関しても、その歴史的な変遷もあわせて学ぶこととする。 なかでも、今後の農業経営のあり方を考える上で要（かなめ）となる「パートナーシップ経営」の概念を理解し、それを進めていくためのツールとなる家族経営協定の意義や取り組みについて学んでいく。さらに、グローバル化の視点から日本のみならず、諸外国の農山村での女性活動の実践事例について学ぶ。		
授業計画	第1講 授業ガイダンス 【安倍】 第2講 生活経営論について 一個人・家庭・地域社会— 【安倍】 第3講 地域社会と女性の役割 【原】 第4講 ソーシャルネットワーク、ソーシャルキャピタルについて 【原】 第5講 農山村女性活動の現状・問題 【安倍】 第6講 農山村女性をめぐる課題 一女性をめぐる諸制度の変遷をふまえて 【安倍】 第7講 パートナーシップ経営 【安倍】 第8講 農業経営多角化への取り組み、6次産業化と女性起業 【安倍】 第9講 諸外国における農山漁村女性の活動状況 【安倍】 第10講 地域活性化の担い手としての女性活動と社会力—総合討論、まとめ 【安倍・原】		
履修上の注意 (準備学習等)	1年次に学ぶ農業経営学のみならず生活経営論についての基礎的な知識を必要とすることから、教科書に指定した文献や生活経営論に関連する文献について、興味の持てる内容を中心として事前に学習して、授業に臨んでほしい。また、少子高齢化について連想することや、思うことを800字程度に事前に書き、ガイダンス時に提出する。		
教科書	『暮らしをつくりかえる生活経営力』 朝倉書店		
参考書	適宜紹介する		

(領域)	社会力	(学群)	農村地域の活性化
(科目名)	地方行政との連携・協働	単位数 開講期	1 単位 2 年次 後期
担当講師	大江 正章 〔出版社コモンズ代表／ジャーナリスト〕		
授業のねらい	市町村の行政と農業には本来、密接な関係がある。本講義では、農業、地域づくりに関する市町村の首長や職員の先端的な政策や発想、地域への波及効果について、当事者およびそれらの詳細に詳しい講師から学ぶ。そして、地域に根ざしつつ、地域を変える農業経営のあり方、地域との関わり方を考える。		
授業の概要	担当講師には、自治体の首長、政策立案の担当者を招く。これまで進めてきた政策を具体的に紹介し、それらが生まれた背景、現状、達成点、今後の課題について講義していただく。あわせて、これからの農業の方向性、若い農業者に期待される役割を検討していく。		
授業計画	第1講、第2講 オリエンテーション（大江正章） 第3講、第4講 島根県旧杵木村（NPO 法人ゆうきびと 福原圧史） 第5講、第6講 愛媛県今治市（産業部次長（兼）営業戦略課長 安井孝） 第7講、第8講 神奈川県横浜市（農政推進課 丸山知志） 第9講、第10講 富山県南砺市（市長・田中幹夫）		
履修上の注意 (準備学習等)	1回目の授業で、各回の参考文献を指定するので、必ず読んでおくこと。		
教科書	大江正章『地域の力ー食・農・まちづくりー』（岩波新書、2008） 大江正章『地域に希望ありーまち・人・仕事を創るー』（岩波新書、2015） 小田切徳美『農山村は消滅しない』（岩波新書、2014） 安井孝『地産地消と学校給食ー有機農業と食育のまちづくりー』（コモンズ、2010）		
参考書	井口隆史・桝潟俊子編著『地域自給のネットワーク』（コモンズ、2013） 小田切徳美・広井良典・大江正章・藤山浩『田園回帰がひらく未来ー農山村再生の最前線ー』（岩波ブックレット、2016） 寄本勝美・小原隆治編『新しい公共と自治の現場』（コモンズ、2011）		

人間力領域シラバス

(領域) 人間力		(学群) 人間力入門	
(科目名) 経営者のための経済学		単位数 開講期	1 単位 1 年次 前期
担当講師	清水 徹朗 [(株)農林中金総合研究所取締役基礎研究部長] 小野澤康晴 [(株)農林中金総合研究所調査第一部長] 南 武志 [(株)農林中金総合研究所調査第二部副部長]		
授業のねらい	本授業は、経営者としての人間力を高めるという観点から、経済学の基礎的な考え方を身につけることを目標としている。その際、農業の独自性や一般経済と農業・農業経営との関係についての理解を深める。 また、各論的な分野については、今日の日本経済のトピックスや基本的な計数やその見方を説明し、日本経済の現状把握力を身につけるとともに、経済現象に対する問題意識を高めることをねらいとしている。		
授業の概要	最初に、農業経営にとって一般経済の動向がどのように影響をもつのか、日本経済の歴史のなかで農業がどのような変化をたどってきたのかという観点から、農業経営と経済について大まかに概観する。そのうえで、経済学の考え方の基本を説明し、農業・農業経営が経済学の視点からどうとらえられるのかを解説する。 後半は、主に日本経済を題材にして、新聞等で取り上げられる話題との関連性をもたせつつ、貿易の理論、貨幣と金融、財政について説明し、日本経済の課題について歴史的な経緯も踏まえて説明する。		
授業計画	第1講 農業経営と経済 [清水] 第2講 経済学の基礎 I (ミクロ経済学) [小野澤] 第3講 経済学の基礎 II (マクロ経済学) [小野澤] 第4講 貿易理論と農産物貿易 [清水] 第5講 貨幣と金融 [小野澤] 第6講 日本の財政と農業政策 [清水] 第7講 日本経済 I [南] 第8講 日本経済 II [南]		
履修上の注意 (準備学習等)	高等学校の「現代社会」ないし「政治・経済」を履修していることを前提に授業を行う。		
教科書	『入門・経済学 第3版』藪下史郎他(有斐閣)、『農業経済学 第4版』荏開津典生他(岩波書店) 『経済学』パーサ・ダスグプタ著、植田和弘ほか訳(岩波書店)		
参考書	授業中に適宜紹介する。		

(領域)	人間力	(学群)	人間力入門	
(科目名)	経営者のための社会学		単位数 開講期	1 単位 1 年次 前期
担当講師	原田 雄太郎〔日本農業経営大学校専任講師〕			
授業のねらい	現代社会は様々な要素で構成されていると同時に様々な現象・問題が起こり、日々変化している。そしてそれは人と人の集まりによって成立している社会だからこそ起こるものである。経営者にはそうした諸問題を洞察し考えることができる幅広い教養が求められる。 このことを踏まえて本講義では、ゆくゆくは地域を担うリーダーを目指す本校の学生が、現代社会のどこに問題を感じ農業という事業を通じて社会にどのように関わっていくのか、どのように貢献していくのか自身で考えるきっかけを提供する。			
授業の概要	第1講ではまず、社会の多様性や社会学の範囲について知り、経営者として社会学を学ぶ意義について確認する。社会が人と人との関係＝集団によって成り立っていることを踏まえて、第2講以降は現代社会の様々な関係性について考えていく。なお、授業は対話形式や、グループワークを取り入れながら学生自身が考え自らの言葉で発することを重視する。			
授業計画	第1講 農業経営者として社会学を学ぶ意義 第2講 社会階層について 第3講 資本主義社会における関係性1 第4講 資本主義社会における関係性2 第5講 現代社会の多様性を考える1 第6講 現代社会の多様性を考える2 第7講 新しい関係性1 第8講 新しい関係性2 第9講 合意形成の本質を考える 第10講 学生発表			
履修上の注意 (準備学習等)	日常的に新聞を読むなどして世の中の現象に幅広く触れておく。また、初回講義までに教科書を読んでおく。			
教科書	古市憲寿『古市くん、社会学を学び直しなさい!!』光文社新書			
参考書	特に定めない。			

(領域) 人間力		(学群) 人間力入門	
(科目名) 時代、世代、消費		単位数 開講期	0. 5 単位 1 年次 後期
担当講師	三浦 展〔社会デザイン研究者、(株)カルチャースタディーズ研究所代表取締役〕 ほか		
授業のねらい	現代社会における経営者が理解しておくべき社会現象やその背景にある社会動向に関して、とくに人口、世代、消費の観点から学ぶ。そこから今後の社会の動向を予測し、それに合わせて農業経営をいかに行っていくべきかを考えることを目的とする。		
授業の概要	本授業では、まず日本の人口の変遷とそれに関わる今後の日本の課題等を把握する。そして戦後世代の特徴、戦後社会の歴史の概観を踏まえ、これからの消費社会のあり方を学ぶ。最後に「第四の消費」的なライフスタイル、食生活などについてゲストの話を聴く。		
授業計画	第1講 日本の人口問題 第2講 日本の代表的な世代とそのマーケティング 第3講 格差消費と第四の消費 第4講 週末は田舎暮らし！～ボーダーを壊し、未来をつくる暮らし方～（仮）		
履修上の注意 (準備学習等)	講義前に日本の戦後の歴史を振り返るとともに、参考文献を読んでおくことが望ましい（とくに『データでわかる2030年の日本』）。		
教科書	『第四の消費』三浦 展 著（朝日新書）		
参考書	『データでわかる2030年の日本』 三浦 展 著（洋泉社） 『日本人はこれから何を買うのか？』三浦 展 著（光文社新書） 『下流老人と幸福老人』三浦 展 著（光文社新書） 『格差固定』三浦展著（光文社）		

(領域) 人間力		(学群) 人間力入門	
(科目名) 経営者のための哲学		単位数 開講期	1 単位 1 年次 後期
担当講師	大平 浩二 [明治学院大学経済学部教授]		
授業のねらい	本講義の目的は、次世代農業経営者としてわが国の農業を担うために必要な判断力・思考力そして日本を取り巻く諸環境の分析能力の基礎を身につけることを目的とする。今や農業も、政治・経済・経営その他の様々な領域 世界規模の状況変化を抜きには語れない。農業も1つの経営であり、その遂行者の一人ひとりが経営者でもある。その意味で、自分の意思や農業観そして哲学を持つ必要がある。講義では、世界の政治・経済状況の変化、経済や経営の基本を学んだ上で、第一線で活躍する各界の経営者の経営思想・経営哲学に触れつつ、それらを基礎として自らの農業経営のあり方を考える。		
授業の概要	①この授業では、経営者の哲学を学ぶにあたって、まず世界の中で、現在日本がどのような状況に置かれているかを概観する。現代の農業も他の産業、工業やサービス業等と無関係には語れない。今進みつつある世界の農業は、グローバルな枠組みの中に組み込まれつつある。そうした点も踏まえた、主体的で広い視野を持つことが重要である。最初の数回の講義においてこうした状況を考える。次に、②企業経営の基本とポイントを学ぶ。ただここでは、単なる経営学上の用語の解説ではなく、現実を正しく知る上での思考の基礎を学ぶ。③経営者の経営哲学についての幾つかのケースを検討する。④併せて、わが国企業の失敗や不祥事を通して経営者のあり方を考える。⑤最後に望ましいリーダーの素質や哲学とそれに根差した組織風土作りを考える。		
授業計画	第1講 講義計画と「変わる世界」 第2講 「変わる世界」と「変わる企業」 第3講 「企業経営」の基本的考え方 1 第4講 「企業経営」の基本的考え方 2 第5講 「経営者の哲学」とは何か 第6講 「ケースから考える」1 第7講 「ケースから考える」2 第8講 「ケースから考える」3 第9講 「不祥事のケースから経営者のあり方を考える」 第10講 講義の最後に当たって		
履修上の注意 (準備学習等)	広く経済・政治・経営・社会等について関心を持つことが必要。新聞・雑誌などにも目を通しておく必要がある。		
教科書	『ステークホルダーの経営学(第2版)』大平浩二編著(中央経済社, 2016) 必要に応じてプリント・資料等を配付する。		
参考書	『経営哲学の授業』経営哲学学会編(PHP研究所)		

(領域) 人間力	(学群) 人間力入門
(科目名) 経営者のための英語力	単位数 開講期 1 単位 1 年次 後期
担当講師	黒川 恵子 [会議通訳]ほか
授業のねらい	農業経営に必要な情報が、グローバルに行き来している現在、情報を直接知る技能が必要であり、なにより英語が必要となる。英語の構造を理解し、辞書があれば大要がつかめる能力が、まず望まれる。次に、具体的に商取引が生じた時、あるいは、海外から取材等を受けた時、基本的な事は聞き取れ、重要なポイントは直接言えるようでありたい。通訳・翻訳を使うにしても、どういう順序で言うか、どういう姿勢をとるかは、日本標準とは違う標準がある。自分を誤解されないように表現し、相手の意図を掴むには、英語のルールを知る必要があり、一定の音声知識も必要である。この授業は、実践的英語の基礎力を身に付けることを目的とする。
授業の概要	この授業では、最初の数回は、様々な切り口からの英語の基礎を学習する。次に自分の意図を伝える定型文の習得。基本を確認しつつ応用力を身に着けていく。なぜヒアリングにつまずくのか、構造を理解し、コツをつかむ。英語は、有用なツールであり、英語力を身につけることは、生きる力を身につけることにつながっていく。英語と日本語の発想の違い、表現の違い、話の進め方の仕方の違いを知り、英語で表現しコミュニケーションすることの楽しさを知っていく。
授業計画	第1講 英語の話し方基礎 第2講 定型語と応用 第3講 コミュニケーション技能※ 第4講 自分を表現、相手を理解※ 第5講 日常用語基礎知識 第6講 ビジネス表現基礎知識 第7講 簡易ビジネスメール読解 第8講 ヒアリング 第9講 表現、主張※ 第10講 総合（書く、話す）※ ※の回は、ネイティブスピーカーの講師と共同で授業をおこなう可能性がある。
履修上の注意 (準備学習等)	中学段階の基本英語文法を理解していることが前提であるが、使わないでいけば忘れてしまう。教科書に指定した本は大変読みやすい、できれば、折にふれ開き、読んでおく。
教科書	『みんなの楽しい英文法』NHK出版
参考書	『ビジネスQuick English <メール>』David Thayne (The Japan Times)

(領域)	人間力	(学群)	人間力入門
(科目名)	経営者のための心理学	単位数 開講期	1 単位 2 年次 前期
担当講師	野田 稔 [明治大学専門職大学院グローバル・ビジネス研究科教授] 浜田 正幸 [多摩大学経営情報学部・同大学院経営情報学研究科教授] 河合 太介 [経営コンサルタント、早稲田大学大学院商学研究科非常勤講師]		
授業のねらい	現在の農業は組織的経営が必須である。その際、従業員のモチベーションやキャリアを考え、指導することが当然求められてくる。そこで、農業に従事しようとする人たちの心理を理解し、適切に対処する知識と技術を習得する。 また、農業は地域社会や、同業者との相互理解や合意形成がなければ、地域で事業を営むことは困難である。したがって、地域社会のコンフリクトの解消や合意形成の際にはたらく集団心理的な力を理解し、またコンフリクト解消から合意形成に至る技術を身に付けることを目的とする。		
授業の概要	この授業では、農業経営をおこなう上で知るべき心理学として、一般的組織マネジメントに必要な社員モチベーションや自己認知などの心理学の領域にフォーカスする。それと同時に地域にとけ込み農業という産業に従事する固有の事象に対する心理学である。本講義では、この二つの領域をバランスよく取り扱うこととする。		
授業計画	第1講 イン트로ダクション リーダーシップと心理学 [野田] 第2講 農業経営者のための社会心理学 [浜田] 第3講 モチベーションの心理学 [浜田] 第4講 社員のエンゲージメント [河合] 第5講 集団の心理 コミュニティの社会心理学 [浜田] 第6講 集団の心理 コンフリクトの解消、交渉の心理 [河合] 第7講 人材育成の心理 [河合] 第8講 メンタルヘルス [浜田] 第9講 自己を高める心理学Ⅰ [野田] 第10講 自己を高める心理学Ⅱ 経営者としてのキャリアデザイン [野田]		
履修上の注意 (準備学習等)	自己の心の動きに注意を向けること。事前に与えられた課題は確実に実行すること。		
教科書	『人を動かし、自分を導く リーダーシップ』野田稔 (KADOKAWA) ※主に第1講で使用 『不機嫌な職場』河合太介 他 (講談社現代新書) その他、必要に応じてプリント等を配付する。		
参考書	『組織論再入門』野田稔 (ダイヤモンド社) ※特に第一部 『二流を超一流に変える「心」の燃やし方 』野田稔 (フォレスト出版)		

(領域) 人間力		(学群) リーダーシップ	
(科目名) 経営者としてのリーダーシップ		単位数 開講期	1 単位 1 年次 後期
担当講師	古山 和宏 [公益財団法人松下政経塾 顧問]		
授業のねらい	本講義は農業経営者に求められるリーダーシップについて考え、これからの農業経営を取り巻く人々からの信頼、尊敬、協力を得られるような経営者を目指し、リーダーに必要な知識、素養を認識し、その資質を培うことを目的とする。		
授業の概要	リーダーとなるために必要となる普遍的な考え方や哲学を学ぶとともに、2年次の「事業計画書」作成に向けた基礎的な講座と位置づけ、授業では、学生同士の検討会、プレゼンテーションを経て、将来の「事業趣意書」を作成する。		
授業計画	第1講 指導者の条件とは1 (講義) 第2講 指導者の条件とは2 (演習) 第3講 経営とは何か (講義) 第4講 志検討会 (演習) 第5講 松下幸之助の経営理念1 (講義) 第6講 松下幸之助の経営理念2 (演習) 第7講 「事業趣意書」の作成 (講義) 第8講 「事業趣意書」の検討 (演習) 第9講 最終プレゼンテーション (演習) 第10講 最終プレゼンテーション (演習)		
履修上の注意 (準備学習等)	課題等については講義前、事前に連絡する。		
教科書	北康利著『同行二人 松下幸之助と歩む旅』(PHP研究所)		
参考書	適時、連絡する。		

(領域)	人間力	(学群)	リーダーシップ
(科目名)	地域・農村のリーダーシップ	単位数 開講期	1 単位 2 年次 前期
担当講師	門間 敏幸 [東京農業大学名誉教授]		
授業のねらい	現在、農業・農村を取り巻く環境は大きく変化しており、従来の延長線上で機械的に経営を展開することは困難になっている。経営者自らが将来の経営環境に関わる内外の動向を予測するとともに、明確な経営理念と経営戦略を樹立して経営を展開することが不可欠になっている。 また、これからの農業経営者は、自らの経営の発展だけでなく、地域の持続的な発展の中で自らの経営の発展を位置づけ、地域および地域の農家とともに発展していくという共生の思想が求められる。さらに、地域の農業及び異業種の経営者間の連携によるネットワーク型農業経営組織の形成、地域の農家の組織化など、多様なリーダーシップが要請される。 本授業では人間力豊かなリーダーシップの本質を理解するとともに、将来の地域・農村のリーダーとして自らが自己変革・自己研鑽するための方法解明に有用な理論・知識・基本的な考え方を講義・演習を通じて付けることを目的とする。		
授業の概要	この授業では、リーダーシップの本質を整理するとともに、地域・農村におけるリーダーシップの特質と特異性を明らかにする。さらに、リーダーシップの源泉となる経営者としての資質や能力の特質を学ぶとともに、農業経営者の能力における総合力の重要性を整理する。 こうした授業目的を達成するため、第1講から第3講では、経営者能力やリーダーシップに関する様々な考え方、知識を整理して提示する。さらに、第4講から第6講では、農業・農村の先駆的リーダー、現代の農業経営者の取り組みに関するケース分析を通してリーダーシップの本質を学ぶ。第7講から第10講では、5人1組のチームを作り、新しい農場の設立構想、理念とビジョン、経営戦略とアクションプランという新しい農場の設立活動への参加を想定した演習を行う。この演習を通して、参加者一人一人が自分と仲間の特性と資質を知り、農業経営における自分の活躍場面を理解し、様々な機能を有するリーダーシップの集合体としての農業経営組織の作り方を学ぶ。		
授業計画	第1講 リーダーシップとは何かーその本質を理解するー 第2講 地域・農村におけるリーダーシップの特質 第3講 リーダーシップの源泉としての経営者能力の特質ードラッカーに学ぶー 第4講 リーダーシップのケース分析ー上杉鷹山に学ぶー 第5講 リーダーシップのケース分析ー二宮尊徳に学ぶー 第6講 リーダーシップのケース分析ー現代の農業経営者に学ぶー 第7講 リーダーシップ演習1 チームを作るー5人で新しい農場を設立するー 第8講 リーダーシップ演習2 理念とビジョンを共有する 第9講 リーダーシップ演習3 経営戦略を樹立する 第10講 リーダーシップ演習4 アクションプランを作る		
履修上の注意 (準備学習等)	受講者自らのリーダーシップを常に考え、自らが理想とすべきリーダーを探しておくこと。		
教科書	特に指定しない。必要に応じてプリント等を配付する。		
参考書	『農に人あり志あり』岸康彦（創森社） 『現代農業経営者の経営者能力』鈴木源太郎（農山漁村文化協会）		

(領域)	人間力	(学群)	グローバル発想	
(科目名)		日本農業史	単位数 開講期	1 単位 2 年次 前期
担当講師		堀口 健治 〔日本農業経営大学校 校長〕 ほか		
授業のねらい		日本農業の近現代史を理解するために、農業史を捉える視角を紹介しながら、授業を進める。非農業との違いが何に由来するかという一般論と、他方、戦後の日本農業を取り巻く、農地改革、高度成長・基本法農政、貿易体制・少子高齢化・耕作放棄・自給率低下・新たな担い手、という具体論を、理解することになる。		
授業の概要		封建制を打ち破り資本主義が全面展開する背景に産業革命がある。蒸気機関から電機、内燃エンジンという技術史を学びながら、なぜ農業はこの流れ（労働手段の技術）にすぐに乗れなかったのか・・・労働対象技術の種苗改良等に力を注ぐのはなぜか、をまず考える。この農業技術論から、次いで有限な土地に規定される農業の発展史（寄生地主制の展開等）、世界的に家族経営が長く主流になる世界的傾向の背景等を理解した上で、日本農業の近現代史に入る。		
授業計画		第1 講 労働手段改良技術、労働対象的技術、土地利用技術の技術論から農業の特殊性の理解 第2 講 農業と非農業の違い。そして農業とアグリビジネスの違い、の由来の理解。他方で大企業・多国籍企業のアグリビジネス、こちらは家族経営の農業、の併存 第3 講 地面に縛られた産業（代表が農業）の歴史：畑作農法論（農法革命）と水田農法論－土地の所有と利用の関係（「共有地利用の悲劇」論の間違い） 第4 講 封建制下の「零細」分散的農地利用を継承し自作農化した旧開国と資本主義に合わせ配分し直した土地所有・利用下の新開国 第5 講 流通業者が先に資本蓄積しやすい農業・ピッグサイクルに代表される農産物価格論の特徴（神の手の市場経済・均衡・発展論の間違い）・早期に税金で導入される卸売市場制度（手数料商人の近代性⇔売買差益商人の前近代性） 第6 講 自由市場経済（米を代表とする農産物の市場競争）下で寄生地主化方向を辿った明治時代の日本農業・発展できない貧窮の小作農（借地大型経営化を期待できず） 第7 講 革命的な日本の農地改革と自作農（革命下の中国の農地解放との違い）・敗戦後の体制改革の意義 第8 講 食料不足を解決した戦後日本農業・高度成長を支える農村からの若手労働力 第9 講 自作農体制から借地農体制へ・大規模化の推進（大規模な担い手であった中国人民公社の解散と家族経営再編成への中国） 第10 講 バブル経済の経験、自由貿易体制下の農業、耕作放棄と後継者難：担い手は誰か、農地利用はどの方向か、自給率低下への考え方。		
履修上の注意 (準備学習等)		授業中の解説・質疑が重要であり、集中し理解してもらう。予習・復習		
教科書		使用しない。黒板、配布資料、パワポを使い、受講生はノートをしっかり取ってもらう。		
参考書		随時、紹介する。		

特別活動シラバス

特別活動		体育的活動	
(科目名) Hiphop ダンス		単位数 開講期	1 単位 1 年次 前期・後期
担当講師	麻生 陽介 [Hiphop ダンサー]		
授業のねらい	ダンスを通じて人と音楽と触れ合い、健康的な日々を送ることを主旨とする。ダンスは基礎の動きの積み上げであり、基礎を根気よくやることが一番の成長の近道であり、それらのプロセスを体感してもらう。 主ではないが、ダンスの歴史についても短時間だが講義を行い、歴史をたどりダンスの本質的に重要とする部分を学ぶ。その考え方は他業界や業種でも通ずるものであり、本業（農業）でも同じように考えるきっかけ作りを目指す。		
授業の概要	この授業では、基礎体力を身につけ、リズムのとり方・体の使い方などについて学ぶ。また学生間での連携を重視した振り付けを学び、一つの作品作りを目指す（一定の基礎を学んだ後）。ダンスの歴史についても、短時間だが授業の終わりに実施する。		
授業計画	<前期> 第1講 リズムの取り方 第2講 体の使い方 第3講 初級ステップ① 第4講 初級ステップ② <後期> 中級から上級のステップや振付などを完成させ、一つの作品を作ることを目指す。		
履修上の注意 (準備学習等)	運動しやすい服装、及び靴(スニーカー)の持参をお願いしたい。		
教科書	特に指定しない。必要に応じてプリント等を配布する。		
参考書	なし		

特別活動		体育的活動	
(科目名) ヨガ		単位数 開講期	1 単位 2 年次 前期・後期
担当講師	羽根綾子 [ヨガインストラクター]		
授業のねらい	ヨガを通じて心と体の健康を目指します。古くからインドに伝わるヨガの行法や哲学を通して、それぞれの日々の生活や、自分自身の心や身体との向き合い方、それぞれの目標に向かう事のインスピレーションに繋げていきます。		
授業の概要	◎ヨガの実践 インドに古くから伝わる健康法、呼吸法、アサナ（ポーズ）、マントラ（お経）、クリヤ（浄化法）などの身体的なアプローチで、心と身体を強くします。また毎回瞑想を行い、自分自身を観察する練習をします。 ◎サットサンガサットサンガとはインドで古くから行われる集まりで、自分の意見や思いを話す機会です。毎週変わるテーマについて、皆で話し合っていきます。		
授業計画	<前期> 第1 講 Asana クラス 講義 ヨガとは？ サットサンガ 自己紹介 第2 講 Asana クラス 太陽礼拝 講義 マントラと瞑想 サットサンガ 良い事を覚えておくという事 第3 講 Asana クラス 立ちポーズ 講義 呼吸法 浄化方法（クリヤ） 第4 講 Asana クラス 前屈 サットサンガ ワイルドネス 第5 講 Asana クラス 後屈、ツイスト 講義 ヨガの聖典 ※後期内容は別途連絡する。		

履修上の注意 (準備学習等)	「インテグラルヨーガ」または「やさしく学ぶバガヴァットギータ」を読んで、400文字以上の感想文を書く。配布するテキストに記入し、初回授業で提出。 授業には毎回テキストと動きやすい服装を持参する事。 時間のある人は、手塚治虫作「ブッダ」を読む事を薦める。
教科書	テキストを配布する。 「インテグラルヨーガ」または「やさしく学ぶバガヴァットギータ」
参考書	『インド思想史』 早島鏡正（東京大学出版） 『インテグラル・ヨーガ パタンジャリのヨガスートラ』 スワミ・サッチダーナンダ著 伊藤久子訳（めるくまーる） 『やさしく学ぶYOGA 哲学 - バガヴァッドギーター』 向井田みお著（Under The Light Yoga School）

特別活動		文化的活動	
(科目名) 華道		単位数 開講期	1 単位 1 年次 前期・後期
担当講師	奥平 清祥 〔石草流いけばな家元後継〕		
授業のねらい	いけばなをはじめとした多種多様な文化に触れながら、先人の残した創意工夫の知恵や、生活者の心理と需要を探り、現代のライフスタイルにおける日本の農と文化の再価値化を図る。		
授業の概要	日本の文化はすべて季節の変遷とともにあり、それを支える農耕とともに成り立った。日本の食文化とは、食べる暦であり、食べる葉であり、食べる美である。それぞれの学生さんがこれから行っていく活動を、時代と世代の需要に合わせて提案するビジネスの形を通して、人々の豊かな生活に貢献することでいかに自らも豊かになれるかという文化をつくること。それを様々な表現手法を体験しながら模索し、経営者としての共感力と教養を高める。ビジネスと文化の重なった部分にある自分の経営方針を探るために、五感を使って考える「ダイアログインザダーク」の体験も計画している。		
授業計画	～眠れる資産をほりおこせ～ 第1回 クールジャパンのジャパンとは。食と農の文化にまつわる傾向 第2回 華道という一文化から振り返る日本の歴史 第3回 先人の知恵を継承するという役割とそのコツ 第4回 暦という生活の知恵と、食と農の役割 第5回 現代の経営にいかせるヒントとしての文化 第6回 心身を豊かにする哲学としての文化 第7回 日本の伝統で再発見する日本人の幸せ感覚の作り方 第8回 「ダイアログインザダーク」体験 第9回 食と農を伝えるツールとしての文化ビジネスの仕掛け方 第10回 現代的ライフスタイルにおける農の役割と文化		
履修上の注意 (準備学習等)	特になし		
教科書	特になし		
参考書	特になし		

特別活動		文化的活動	
(科目名) 囲碁		単位数 開講期	1 単位 2 年次 前期・後期
担当講師	矢代 久美子 〔公益財団法人日本棋院 棋士（六段）〕		
授業のねらい	囲碁は日本の伝統文化であると同時に、世界75カ国・地域、4000万人以上の方が対局する。この授業では、①囲碁を学ぶことを通して、考える力を身につけること、②囲碁の歴史や現在の囲碁の世界を学ぶこと を目的とする。		
授業の概要	囲碁を対局するうえで大切であるルールと終局を小さな碁盤(6路盤・9路盤)で学ぶ。その後、通常の対局で使用する19路盤では模範的な碁を繰り返し並べ、その途中から対局することで、布石(序盤)の考え方を身につけるとともに、終局の理解を図る。授業の中で実施する問題演習を通して授業の理解度を確認する。毎回の授業では対局を行い、最終的には19路盤で対局できるようになることを到達目標とする。囲碁の歴史や囲碁の世界についての解説も行う。		
授業計画	<前期> 第1講 6路盤 囲碁概論と囲碁のルールの解説 第2講 6路盤 囲碁のルールの復習と基本ルールの確認テスト 第3講 9路盤 囲碁の世界① 囲碁の終局の解説 第4講 9路盤 対局の流れと初歩技術の解説 問題演習① 第5講 9路盤 多面打ち指導碁 19路盤 模範碁の解説と対局① <後期> 第6講 19路盤 模範碁の解説と対局② 囲碁の世界② 第7講 19路盤 9子局（ハンデ対局）の解説・連碁対局 模範碁の解説と対局③ 第8講 19路盤 模範碁の解説と対局④ ペア碁対局 第9講 19路盤 模範碁の解説と対局⑤ 問題演習② 第10講 19路盤 模範碁の解説と対局⑥ 団体対抗戦 まとめ		
履修上の注意 (準備学習等)	授業後に該当部分について教科書を読んで復習すること。		
教科書	『東大教養囲碁講座』石倉昇・梅沢由香里・黒瀧正憲・兵頭俊夫（光文社新書） 『実践囲碁総合演習』（日本棋院）		
参考書	『ヒカルの碁』原作/ほったゆみ 漫画/小畑健 監修/梅沢由香里（集英社）		

ゼ ミ

(領域) ゼミ		(学群) ゼミ	
(科目名) ゼミ		単位数 開講期	6単位 1・2年次
担当講師	小野 史〔日本農業経営大学校 専任講師〕		
授業のねらい	「食べる人、使う人のことを考える」、「みずからのテーマを定め、掘り下げる」、「考えたこと、掘り下げたことを伝える」経験を通して、みずからの生産物や経営の強みを磨き、消費者、実需者とよりよい関係を築いて持続可能な農業を営むための力をつける。		
授業の概要	みずからの生産物や経営の強みを磨き、消費者、実需者とよりよい関係を築いて持続可能な農業を営むための知識、調査分析手法、考え方を習得する。特に農産物の購買・消費について、自分なりの根拠と実感を持った上で経営計画を立てることを目指す。 「食べる人、使う人のことを考える」経験として、農産物を中心とした食料の流通、購買、消費など、フードシステムの川下を主な対象として、文献輪読、現場視察、消費者調査等をおこなう。 「みずからのテーマを定め、掘り下げる」ために、ゼミ生それぞれが就農計画に応じたテーマを設定し、調査・実践活動をおこなう（マイプロジェクト）。 「考えたこと、掘り下げたことを伝える」方法として、各活動においては、事前調査と振り返りをおこない、最終的には活動成果を報告書等としてまとめる。各自のテーマについても、ゼミ内外で適宜発表の機会を設けていく。		
授業計画	【1年次】 〔文献輪読〕 食生活、農産物の流通・消費、消費者調査などに関する基礎的な文献を扱う。 〔調査レポート作成〕 テーマ:各自が生産する予定の農産物について、自家の農業経営について、参考とする農業経営について、企業実習の希望業界／企業について など。 【2年次】 〔文献輪読〕 ゼミ生の課題に即した食生活、農産物の流通・消費、事業計画の策定などに関する文献を扱う。 〔調査レポート作成〕 テーマ:各自が生産する予定の農産物について、就農予定地について、卒業後取り組みたいサービスについて など。 【合同ゼミ】 〔消費者調査〕 課題設定、仮説の設定、調査、分析、成果のまとめという一連の流れを実際に体験し、自ら		

	の経営計画に生かす。 ①消費者インタビュー(年2回以上)…ゲストを招き、主に食品の購買・消費、食生活についてインタビューをおこなう。インタビュー後はインタビュー結果を分析しレポートにまとめる。 ②消費者アンケート(年1回以上)…各自の課題、仮説に基づいた調査票を作成し、調査紙あるいはwebによってアンケート調査をおこなう。収集したデータは定性的／定量的に分析し、結果をレポートにまとめる。 [現場視察] (日帰り3回以上、宿泊1回以上)食品の購買・消費、食生活に関わる現場を訪問・視察する。デパート食品売り場、スーパーマーケット、専門小売店、農産物直売所、食に関する取り組みの当事者など。
履修上の注意 (準備学習等)	伝える力を磨く手段として、ゼミFacebookの運営、「ゼミだより」の発行をおこなっている。また、当ゼミが主催で勉強会(After School Seminar)もおこなっている。授業計画の内容に留まらず、こうした活動にも意欲を持って参加することが望ましい。ゼミ生からの企画立案も奨励している。 ゼミ費は輪読文献の購入、現場視察交通費、インタビュー経費(謝金・会場代)、消費者アンケート経費(リサーチ会社委託費、印刷費)等に主に用いる。 インタビュー、視察については、各自の都合を聞いた上で土・日・祝日におこなう場合もある。
教科書	輪読する文献は年によって変更する。以下については輪読の有無に関わらず配布する。 岩村暢子『変わる家族変わる食卓ー真実に破壊されるマーケティング常識』中公文庫、2014年 時子山ひろみ・荏開津典生・中嶋康博『フードシステムの経済学 第5版』医歯薬出版、2013年 福井遥子『お客さまの“生の声”を聞くインタビュー調査のすすめ方』実務教育出版、2010年
参考書	ゼミ生の興味・関心、視察先等に応じて適宜指示する。

(領域) ゼミ		(学群) ゼミ	
(科目名) ゼミ		単位数 開講期	6 単位 1・2 年次
担当講師	小口広太（日本農業経営大学校 専任講師）		
授業のねらい	テーマ：＜食と農＞の社会学 農業経営者には、＜食と農＞を一体的な関係性として捉え、「自然」「地域」「社会」に寄り添う人間力が必要となる。「食」を支える「農」の現場、「農」を支える「食」の現場がどのように動いているのか、豊富なフィールドワークをつうじて多面的に読み解く力を身につける。		
授業の概要	学年別ゼミ【1 年次】 ①ローカルから始まる＜食と農＞の実践（1） ：中山間地域における地域づくり、都市農業の先駆性について学ぶ。 ②現代における「食」の貧困化と「農」の可能性（1） ：未来を担う「子ども」を切り口に学ぶ。 学年別ゼミ【2 年次】 ①ローカルから始まる＜食と農＞の実践（2） ：中山間地域における地域づくり、都市農業の先駆性について学ぶ。 ②現代における「食」の貧困化と「農」の可能性（2） ：「食」へのアクセスを切り口に学ぶ。 ③経営計画の策定（卒業研究） ：2 年次前期から始め、週 1 のペースで議論する。 合同ゼミ 有機農業の実践について学ぶ。		
授業計画	学年別ゼミ【1 年次】 [前期] ①滋賀県東近江市（5 月中旬、1 泊 2 日） ②霜里農場（埼玉県小川町） ③石坂ファームハウス（東京都日野市） [後期] ①高知県四万十町（3 月上旬、1 泊 2 日） ②くにたちはたけんぼ（東京都国立市）、他都市農業の現場を複数訪問予定 ③NPO 法人豊島子ども WAKUWAKU ネットワーク		

	学年別ゼミ【2年次】 〔前期〕 ①徳島県上勝町（6月中旬、1泊2日） ②都市農業の現場を複数訪問予定 ③フードバンクかわさき 〔後期〕 ①福島県二本松市東和地区（2月中旬、1泊2日） ②都市農業の現場を複数訪問予定 ③経営計画の策定（卒業研究） 合同ゼミ ①茨城県石岡市旧八郷町（1泊2日） ②有機農業の現場を複数訪問予定
履修上の注意 (準備学習等)	・計画通りに進めるよう心掛けますが、社会情勢の変化や教員の関心でFW先や輪読文献が変更になることがある。 ・通常講義や特別講義で学んだことを前提に進める。その学びを持ってゼミで現場に出て検証し、消化するという反復作業を行う。 ・農業のことだけでなく、社会全体に、国内だけでなく世界に目を向ける。 ・ゼミ活動費は学年別のFWで全て消化する。使用する教科書、合同ゼミや自主ゼミの費用は個人負担で行う。
教科書	以下はあくまで予定であり、候補である。 学年別ゼミ【1年次】 ・生源寺眞一『農業と人間』（岩波書店、2013年） ・好井裕明『「今、ここ」から考える社会学』（ちくまプリマー新書、2016年） ・橘木俊詔『格差社会』（岩波新書、2006年） ・阿部彩『子どもの貧困』（岩波新書、2008年） ・西山未真『農村と都市を結ぶソーシャルビジネスによる農山村再生』（筑波書房、2015年） ・松永桂子『ローカル志向の時代』（光文社新書、2015年） 学年別ゼミ【2年次】 ・大原悦子『フードバンクという挑戦』（岩波現代文庫、2016年） ・浅見彰宏『ぼくが百姓になった理由』（コモンズ、2012年） ・塩見直紀『半農半Xという生き方〔決定版〕』（ちくま文庫、2014年） ・稲垣文彦ほか『震災復興が語る農山村再生』（コモンズ、2014年） ・野中昌法『農と言える日本人』（コモンズ、2014年） ・星野紀代子『旅とオーガニックと幸せと』（コモンズ、2015年）
参考書	随時、関連する図書、資料、映像等を紹介する。

(領域) ゼミ		(学群) ゼミ	
(科目名) ゼミ		単位数 開講期	6単位 1・2年次
担当講師	原田 雄太郎〔日本農業経営大学校専任講師〕		
授業のねらい	経営者には時代や環境の変化をはじめ社会の動きを考える力が求められる。現代社会は資本主義経済であり、企業が利潤を求めて生産活動を行い、その生産物あるいはサービスは商品となって市場で交換される。現代社会はこの経済活動に基礎を置いているといっても過言ではない。したがって、社会の動きを考えるためには経済活動の本質を知ることが重要となってくる。 以上のことから、本ゼミでは幅広い社会現象を経済的な視点を中心に考える。そのことによって経済社会に対する見方や勘を育てる。その上で各自が農業に対する考えや想いを固め卒業研究に取り組む。		
授業の概要	具体的には文献輪読や現地視察を通して下記のことに取り組む。 1. 資本主義経済に対する理解を深める 資本主義経済下で事業を営むための基礎知識として経済に対する理解を深める。資本主義経済の性格や市場について文献や議論を通して学ぶ。 2. 金融について理解する 資金調達という経営的に必須の視点はもちろんであるが、それ以上にお金が回ることの意味や、銀行などの金融機関からの融資とは違う金融の形態についても学ぶ。 3. 再生可能エネルギーと地域自給について学ぶ 再生可能エネルギーを中心とした地域自給の取り組みや概念を理解し、今後農村地域のあり方のひとつとしてのエネルギー自給を考える。 4. 卒業研究 1年次後期より卒業研究について取り組む。 5. ゼミ報 日々のゼミ活動をしっかりと文書として残し、それらを年度末に取りまとめて冊子にしてゼミ報を発行する。		
授業計画	1年次 4～7月 ・文献輪読 ・視察		

	<u>11月～12月</u> ・文献輪読 ・視察 <u>1月～3月</u> ・文献輪読 ・卒業研究 ・ゼミ年報編集 2年次 <u>4～7月</u> ・文献輪読 ・視察（北海道） ・卒業研究 <u>11～12月</u> ・卒業研究 ・視察 <u>1～3月</u> ・卒業研究 ※輪読する文献についてはゼミメンバーの希望などを勘案して、相談の上決める。 ※視察については、基本的には合同ゼミにて行く。前期の視察は北海道の網走or十勝にて農業関連の視察および、東京農大オホーツクキャンパス上田ゼミとのゼミ間交流を予定している。後期の視察については、視察地決めから学生と教員で一緒に検討する。スケジュール上、時間割に設けられたゼミの時間以外をつかって視察先を検討や準備をすることもありうる。
履修上の注意 (準備学習等)	ゼミは学生が主体的に学ぶ場である。視察先検討や輪読する文献の候補も自ら積極的に提案して欲しい。 視察にかかる旅費などの費用については予算内で収める予定ではあるが、視察先、移動手段、視察回数、時期などによりその限りではないので、その点留意してもらいたい。
教科書	特に定めない。輪読に使う文献もゼミ生で候補・意見を出し合って相談して決める。
参考書	特に定めない。

(領域) ゼミ		(学群) ゼミ	
(科目名) ゼミ		単位数 開講期	6 単位 1・2 年次
担当講師	松尾 和典 〔日本農業経営大学校 専任講師〕		
授業のねらい	経営者には、現実やファクトを分析する力と同時に、未来へのパースペクティブが必要です。 経営者としての実践を支える方法を学ぶために、リテラシーの獲得として、思考法や技法を学びます。リベラル・アーツを学ぶこと意識し、フレームワークを構築する力を養います。そのために、自律的な学びの相互支援が可能な学びのコミュニティを形成します。それらから、未来を創造するパースペクティブを身につけることを目的としています。		
授業の概要	異分野・異業種からの学びの機会こそ最も重要だと考えていますので、農業やビジネス分野だけにとどまらず、アートやテクノロジー、思想といったさまざまな領域に関することを、輪読を通じて学んでいきます。 ゼミの中心的な活動として、学生のゼミでの成果をアウトプットする場を設けています。前期・後期それぞれ1回ずつ、外部のゲストに来てもらい、成果物と発表への評価をもらっています。ゲストからのフィードバックをもとに、内容をブラッシュアップしていきます。 また、ミュージアムや文化施設を訪れ、「ほんもの」に触れることでの審美眼を養う機会も考えています。		
授業計画	1年次前期 マーケティング・マインドおよびロジカル・シンキングの習得 経営計画の策定 (1) 1年次後期 リベラル・アーツの獲得、ドキュメンテーション技法の習得 経営計画の策定 (2) 2年次前期 クリエイティブ発想および定量分析のトレーニング 経営計画の策定 (3) 2年次後期 デザイン思考の実践 経営計画の策定 (4)		
履修上の注意 (準備学習等)	本ゼミは、協働でよりよい「学びのコミュニティ」づくりを率先して推進するメンバーで活動しています。その前提でエントリーをお願いします。		
教科書	開始後に指定する		
参考書	開始後に指定する		

2017 年度 日本農業経営大学校 シラバス

(2017 年 4 月発行)

(連絡先)

一般社団法人アグリフューチャージャパン 教務部

〒108-0075 東京都港区港南 2-10-13

農林中央金庫品川研修センター 5 階

TEL 03-5781-3751 FAX 03-5781-3752

E-mail jaiam@afj.or.jp

URL <http://jaiam.afj.or.jp>



**Japan Institute of
Agricultural Management**